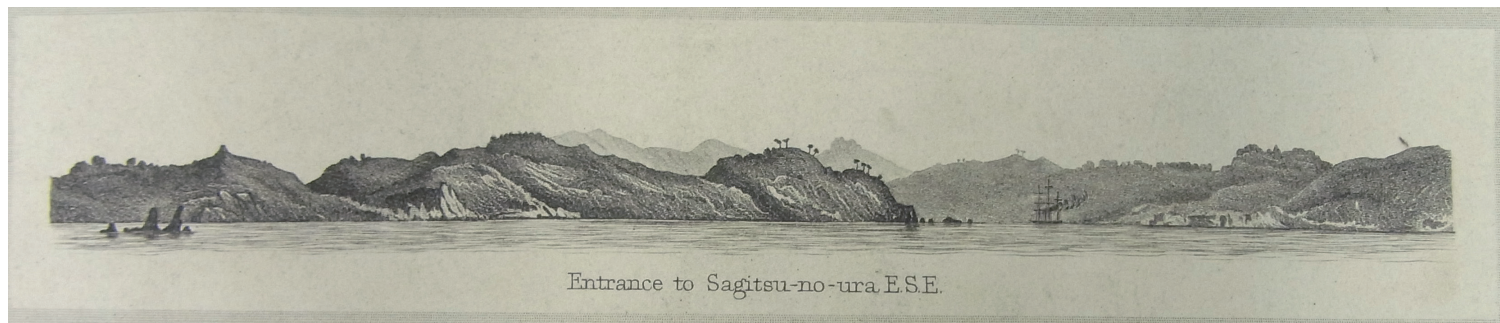


画像史料解析センターの成果と課題 II

—設立 20 周年記念報告書—



2018 年 1 月

東京大学史料編纂所附属
画像史料解析センター

目次

はじめに	1
I 研究プロジェクト報告 2007~2016	3
第1分野 (絵画史料)	3
1. 中近世肖像画研究	3
2. 中近世公家肖像画の撮影デジタル化・解析	7
3. 荘園絵図	8
4. 内務省引継地図および関連史料についての研究	12
5. 長篠合戦図屏風	16
6. 東アジアにおける「倭寇」画像の収集と分析	20
7. 近世都市図解析	24
8. 近世初期天下普請関係画像史料の蒐集・研究	25
第2分野 (画像史料)	27
9. 古写真研究	27
10. 画像史料による近世儀礼の空間構造と時間的遷移に関する研究	32
11. 南島関係画像資料の研究	35
12. 森川杜園『正倉院御物写』の研究	38
13. 戊辰戦争期摺物画像研究	42
14. 赤門書庫旧蔵地図	45
15. 江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究	48
第3分野 (古文書画像)	50
16. 花押彙纂の画像データベース構築	50
17. 金石文拓本史料の整理と公開	53
18. 所内デジタル素材に関する実験	55
19. 電子くずし字字典データベース開発	57
20. 中国第一歴史档案馆所蔵日本関係档案画像デジタル化	61
21. 近世日蘭関係画像史料研究	63
22. 本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究	66
23. デジタル画像分析に基づいた古文書料紙の研究	69
24. 古文書画像を用いた編纂システムの研究	70
25. 未整理画像史料データの統合化研究	71

II	データベース紹介	73
1	花押カード	73
2	花押彙纂	73
3	歴史絵引	73
4	史料編纂所所蔵肖像画模本	74
5	肖像情報	74
6	史料編纂所所蔵荘園絵図模本	74
7	金石文拓本史料	74
8	摺物	74
9	錦絵	75
10	古写真	75
11	電子くずし字字典	76
III	資料集	77
	おわりに —研究事業 10 年間の成果と展望—	85

表紙図版：Japan Kiusiu, W.coast, Sagitsu-no-ura（天草崎津浦 1868 年測量 赤門書庫旧蔵地図）

◇本書は、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター設立 20 周年記念報告書として、2007 年度から 2016 年度まで 10 年間のセンターの活動について収録した。ただし、必要に応じてそれ以外の期間も含めた。なお、センターが設立された 1997 年度から 10 年間の活動については、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター開設 10 周年記念報告書 画像史料解析センターの成果と課題』（2007 年 6 月）として刊行した（WEB 版 http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/gazo/CSVS_10report.pdf）。

◇必要に応じて次の略称を用いた。

『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』→『画像史料解析センター通信』

プロジェクト → PJ

データベース → DB

画像史料解析センター設立 20 周年記念事業実行委員会
（及川亘 高橋敏子 堀川康史 山口英男）

はじめに

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センターは、1997年4月、「日本史に関する各種画像史料及び画像史料情報を収集・整理して蓄積するとともに、電子計算機等による画像情報処理を生かして解析・研究を行い、その成果を学内外に公開すること」を目的として設立された。センターには、絵画史料分野、画像史料分野、古文書画像分野の3分野を置き、毎年度10数件程度の研究プロジェクトチームが活動することで研究を展開してきた。

史料編纂所は、長い研究・編纂事業の継続の中で、絵巻・屏風絵・肖像画、錦絵・摺物や古写真等の絵画・画像史料の研究はもとより、古文書などを含めた各種史料の画像情報からのアプローチの成果を蓄積してきた。日本史学界の動向に応ずる形でそれらの一層の発展を図ることが、センター設立の一つの背景であった。また、電子計算機を用いた情報処理技術の急速な進歩によって、画像史料データの収集・整理・公開とそれらの解析に飛躍的な発展が期待される状況の中で、日本史分野においてそれを推進する研究組織が求められていたことも、センター設立のもう一つの背景であった。

設立後のセンターは、こうした状況を踏まえて研究活動を精力的に展開し、当初10年間の成果については、2007年6月に『画像史料解析センターの成果と課題』（画像史料解析センター開設10周年記念報告書）として報告した。このたびセンター設立20周年を迎えるにあたり、上記報告書のあとを受ける形で記念報告書を刊行し、その後の10年間のセンター事業の概要を報告するとともに、その成果と課題を整理することで今後の研究活動の糧とする次第である。

I 研究プロジェクト報告 2007～2016

第1分野（絵画史料）

1 中近世肖像画研究プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称</p> <p>「歴史絵引データベース・肖像画模本データベース構築PJ」2007～11年度 「中近世肖像画研究PJ」2012～16年度</p> <p>※次のPJは、本PJと連携して活動した。</p> <p>「中近世公家肖像画の撮影デジタル化・解析PJ」（代表・山口和夫、2007年度） 「近世肖像画調査・収集・解析PJ」（同、2008年度） 「中近世肖像画賛の史料情報化PJ」（代表・松澤克行、2013～15年度）</p>
<p>(2)実施年度</p> <p>1997年度～2016年度（継続中）</p>
<p>(3)研究組織</p> <p>代表：加藤友康（2007～09年度）、保谷徹（2010～11年度）、藤原重雄（2012～16年度） メンバー：高橋典幸（2007～10年度）、谷昭佳（2007～10年度）、中村尚暁（2007～08年度）、西田友広（2014～16年度）。</p> <p>以下は全期間（2007～2016年度）： 松澤克行、藤原重雄、安達千鶴子（研究支援推進員）、太田まり子（同） 共同研究員：米倉迪夫（2010年度、東京文化財研究所名誉研究員）、高岸輝（2014～16年度、人文社会系研究科） 研究協力者（所属は当時在籍ないし修了）： 相澤正彦（2010年度、国内研究員、成城大学）、増田孝（2013～15年度、愛知東邦大学）、阿部遼子・薄田大輔・本多康子・椎野晃史（学習院大学大学院）、大塚紀弘・角和裕子・木下聡（東京大学大学院）、村山卓（立正大学大学院）、大澤泉・土山祐之（早稲田大学大学院）、西中利江・和田麻子（お茶の水女子大学大学院）、菅原岳（東京大学）ほか。</p>
<p>(4)研究目的・概要</p> <p>センターの設置目的である、各種画像史料の調査研究の一環として、本所所蔵の肖像画模本を中心に、所蔵するその他の模本類を調査し、写真・画賛等を情報化してデータベースにて提供する。併せて、模本を作成して所蔵している肖像画はもとより、所蔵していない肖像画・肖像彫刻・古写真の情報を収集して蓄積する。さらに、これらの絵画史料を研究・分析するための基盤的な知識を、歴史絵引データベースという形で集約し提供する。こうした工具作りに加え、中近世の歴史史料として絵画を捉えた研究を実践し、美術史研究と接点を保ちながら、相互に資する作品や史料の紹介を逐次行う。</p>

(5)研究経過と成果

まず第一に、「所蔵肖像画模本DB」「肖像情報DB」「歴史絵引DB」という3データベースの改善・維持管理がある。

「所蔵肖像画模本DB」については、画像データをより高精細なもの（A4サイズの出版印刷には耐える）へと差し替え、画賛等のフルテキストを登録し、画像の表現内容の記述もキーワード登録という簡略化した方法によって、多数をカバーしている。

「肖像情報DB」については、データ採取は地方史を中心としていたが、展覧会図録の大型カラー化に伴って、新規のデータを充実させる必要が生じる段階となっており、予算・人員の範囲で部分的ではあるが、カードデータを持続的に蓄積している（現在は直接エクセルに入力）。また、Web上にパーマリンクで公開されている画像についても、採取を始めている。こうしたデータ採取の前提として、相対的に寄贈の少ない美術系の展示・大型図録について、買い漏らしがないように購入して揃える努力をしている。

「歴史絵引DB」については、システムの小改修を漸次積み重ね、形式上の不備が生じていた語彙（キャプション検索）データの再構築を終えて、2017年秋にひとまず安定的な状態へと戻した。また新規の書目追加も行っている。

第二には、絵画史料の調査である。肖像画以外の本所架蔵の模写についても、機会あるごとに調書を作成している。特に金石文PJと協調して、模本の中に含まれる金石文類（棟札・制札・拓本など）は一通り調査を行った。また、古写真研究PJ・ガラス乾板PJなどと協調して、台紙付き写真についても内容記述を行っている。これらは随時、所蔵史料目録DBに情報を追加しているが、まだ登録できていない書誌データもある。

また「益田家寄託史料」の肖像画ほか絵画の調査を、人文社会系研究科と共同して、学生・院生への教育機会としても行った。肖像画については、保存状態が必ずしも良好でないため、レプリカ作成可能なスペックで撮影も行い、史料保全に努めている。

山口和夫・松澤克行がセンター専任教員となっている期間には、特に近世の公家肖像画の調査や画賛フルテキストデータの校正などに労力を割いて、史料情報の蒐集や洗練に努め、データベースの充実をより推進した。作品調査・撮影の対象としては、秋田家史料（東北大学附属図書館・仙台市博物館）、二条家・広橋家・冷泉家・陽明文庫・京都大学総合博物館・妙心寺大法院などの歴代肖像画、大倉集古館蔵『名将肖像図帖』などがあり、写真フィルムによる蒐集やデジタル化、展覧会出陳の際の熟覧も行った。

この他、各メンバーの個人研究でもあるが、中世・近世の絵画史料の調査報告や画事に関する文献の紹介分析など、『画像史料解析センター通信』の誌面を活用して発表を続けており、同誌の「文献案内」にも最近の論文の紹介を投稿して、研究機関としてのセンターの存在感が薄くならないよう、持続的な活動を行っている。

特に密接に関連する外部資金としては、科学研究費基盤（A）「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」（研究代表者・加藤友康、2004～07年度）がある。鷹司本「年中行事絵巻」の関連史料による検索・画像リンクのシステムを作成した。

(6)残された課題と今後の展望

「肖像画模本DB」に関しては、人物をキーとして花押や筆跡、系図・伝記などと串刺しでの人物情報の検索に対応するとともに、画賛のフルテキストデータが備わったことで、くずし字データベースなどとの連携も可能となってきた。特に大量の禅僧の頂相は、本所での蓄積がまだ薄い分野の語彙や字形・書風への展望が開ける。

最近になって、IIIFでCC-BYによる高精細画像の提供という流れが出てきているが、通常の研究では利用する水準にない写本・版本・模本等の画像が、有力機関から大量に公開される方向となっている現状下では、日本史学の専門的な研究機関として、発信する側の責任において、模本の限界を認識した上でご利用頂くための工夫が求められる。特に本所の模本の場合、原本所蔵者があり、多くの場合は原本自体が現存するので、本来的には原本に当たってもらうよう、注意の喚起が必要だろう。それには、所蔵模本の模本としての性格を見極めるような史学史的な研究が課題である。

「歴史絵引DB」についてはシステムと既存データの復旧がひと段落した段階である。画像検索については、トレース図は出来ているものの、スキャンやテキストデータ未了のため溜まっている分があったり、既公開分についても、画像サイズが現在のWeb環境に比して小さく、画像の差し替えを視野に入れる必要がある。キャプション検索については、服飾史・有職故実以外の分野に広げて、基本書からのデータ採取を進めて、充実させてゆく。また、歴史的な図典についても、所蔵史料の画像公開を併せて進める課題を掲げてきたが、他機関が公開する画像を利用する方法も一考の価値があろう（同じアイデアで、国際日本文化研究センター「近世絵入百科事典データベース」が試作版として『訓蒙図彙』を収録しており、「古事類苑全文データベース」と同じく、重複を避けることも考慮することになる）。

データベースの維持・発展のためには、ある程度の専門的な知識を持ったデータの作成者・採取者が必要であるが、常時確保できる状況にはなく、大きな課題となっている。改善の方策があるとは言えないが、世間一般からの視覚的史料に対する関心は高いことから、研究機関として提供すべき情報の充実が求められる。また、書庫の狭隘化は深刻ではあるが、蔵書の鮮度を落とさず、かつ研究史にも適切に配慮したものとなるよう、図録や古書の収集を継続する必要があるが、組織として取り組むべき課題でもある。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

『画像史料解析センター通信』を中心に多数あり、『所報』各年度の教員活動報告に掲載。特に画像データベースやインターネット、画像史料と歴史学に関する総論分野については下記がある。

藤原重雄「史料校訂に関わるデジタル環境」

(楊曉捷・小松和彦・荒木浩編『デジタル人文学のすすめ』(勉誠出版、2013年8月)

藤原重雄「日本史教科書と絵画・イメージの扱い」

(『ニューサポート 高校社会』22、東京書籍、2014年9月)、

藤原重雄「画像資料と歴史研究・叙述・教育」

(『岩波講座 日本歴史』別巻二・史料論、岩波書店、2015年12月)、
藤原重雄「肖像画模本／歴史絵引データベースの課題」

(第11回 人間文化研究情報資源共有化研究会 「人間文化研究機構のもつ画像データ
共有化の前進に向けて」2016年2月6日、TKP ガーデンシティ京都、要旨集『人間文
化研究情報資源共有化研究会報告集』7〔2017年3月〕あり)

密接に関連した外部資金

科学研究費基盤 (A) 「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷
移に関する研究」(研究代表者・加藤友康、2004～07年度)

関連するデータベース

「史料編纂所所蔵肖像画模本データベース」「肖像情報データベース」
「歴史絵引データベース」

The screenshot shows a web browser window displaying a digital archive page. The page title is "史料編纂所所蔵肖像画模本データベース" (Digital Archive of Portrait Painting Copies). The main content area is divided into two columns. The left column contains a list of metadata for a specific item, including its ID (以-145), title (益田(牛庵)元祥画像(甲冑)), and other details like dimensions and materials. The right column shows two images: a full-body portrait of a samurai on a white horse, and a close-up of the samurai's face wearing a helmet with a dragon crest and armor.

【架番号】	以-145
【標題】	益田(牛庵)元祥画像(甲冑)
【撮影時原本所蔵者】	
【撮影年月日】	
【寸法】	108.1×51.6 (152.2×64.3)
【材質】	紙本
【彩色】	着色
【註文】	全年代 大居士肖像 功名汗馬争 義将三玄支甲冑 寧々丹精集 最終物外主人公 正宗住山野神奇畫堂玄龍陣録 (東京) (未印)

肖像画模本データベース 益田(牛庵)元祥画像(甲冑)

2 中近世公家肖像画の撮影デジタル化・解析プロジェクト

(1)プロジェクト名称 中近世公家肖像画の撮影デジタル化・解析プロジェクト
(2)実施年度 2007年度～2008年度
(3)研究組織 代表：山口和夫 メンバー：松澤克行
(4)研究目的・概要 肖像画のうち近世諸公家の事例拡充を期し、「二条家歴代画像類」・「広橋家歴代等画像類」（像主は中世・近世に及ぶ）を主対象に4×5カラー撮影するとともに、裏面・軸・付帯紙片・箱書等を調査し、フィルムのデジタル化も試行した。
(5)研究経過と成果 上記史料群を調査・撮影し、フィルムをデジタル化した。 さらに陽明文庫(近衛家)・時雨亭文庫(冷泉家)から所蔵肖像画フィルム既存分を借用し、デジタル化を試行した。
(6)残された課題と今後の展望 所外所在（個人・財団所蔵分）の史料を対象として試行したため、史料画像の利用・公開については、各所蔵者の許諾が必要である。 対象とした以外の公家諸家についても史料伝存状況を調査し、デジタル撮影を展開する可能性はあるが、多くの作例の遺存が予想され、メンバーがセンター専従でなく編纂・出版物を主担している現状では、容易でないと考えている。

3 荘園絵図プロジェクト

(1)プロジェクト名称 荘園絵図プロジェクト
(2)実施年度 1998年度～2016年度（継続中）
(3)研究組織 代表：榎原雅治 メンバー：稲田奈津子・井上聡・遠藤基郎・及川亘・鴨川達夫・川本慎自・菊地大樹・久留島典子・末柄豊・高橋慎一郎・高橋敏子・高山さやか・谷昭佳・鶴田啓・西田友広・林譲・藤原重雄・前川祐一郎・村井祐樹・村岡ゆかり・伴瀬明美・山口英男・山家浩樹（以上2016年度現在） （2007年度以降プロジェクトに在籍した元メンバー） 石川徹也・石上英一・加藤友康・近藤成一・高橋典幸・中村尚暁 研究協力者：佐々田悠・北村安裕・児嶋貴行・伊藤瑠美・守田逸人・岩井（鈴木）沙織 センター客員教員：青山宏夫（国立歴史民俗博物館、2007年度）・高橋一樹（国立歴史民俗博物館、現武蔵大学、2008～10年度）・原田正俊（関西大学、2014～15年度） 共同研究員：岡村吉彦（鳥取県史編さん室、2008～15年度）・海津一朗（和歌山大学、2011～15年度）
(4)研究目的・概要 古代・中世荘園絵図史料の収集・研究を進め、絵図研究の基盤的環境の整備を行う目的で、①『日本荘園絵図聚影』及びその積文編の編纂・刊行 ②荘園絵図データベースの構築・更新を実施する。荘園絵図は多くは寺社の重宝であり、形態・大きさもさまざまであることから、原本の閲覧が制限されている。したがって、原本に基づく精細で網羅的な画像史料集の刊行と原本調査に基づくデータの公開・共有は、研究環境整備の上で大きな意義をもつと考えられる。
(5)研究経過と成果 1978年以来、荘園絵図研究プロジェクトチームを組織して、荘園絵図史料の調査・収集・研究を蓄積し、これまでに『日本荘園絵図聚影』7冊（1988年-2002年、完了）、『日本荘園絵図聚影積文編』2冊（2007・2016年、継続中）を刊行してきた。 『日本荘園絵図聚影』本編は、このプロジェクトによってあらたに撮影した高精細写真をもとにコロタイプ印刷によって制作した史料集であり、現在荘園絵図を画像として利用する際の定本となっている。積文編刊行にあたっては、描かれた図像や文字を正確に判読して、それらを日本画家が制作した詳細なトレース図上に集約するとともに、絵図の作成過程、作成目的などについての検討を行っている。その成果は積文編、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』、『東京大学史料編纂所研究紀要』、後述する科研の報告書などで公開してきた。

また「伯耆国河村郡東郷庄絵図」のように、関連する自治体と連携して研究を進め、荘園絵図・古地図・現行地形図・空中写真やデータを活用してDVDを作製し、出前授業を行うなど、地域における社会教育に貢献しているものもある。

さらに2002年には、史料編纂所が所蔵している荘園絵図模本の高精細デジタルデータを基礎とする「史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース」を開発した。高精細画像閲覧システムは、画像細部の観察に優れた方法であるとともに、このデータベースでは、トレース図・釈文・参考文献など関連情報とのリンク、さらには画像の構図や図様を読み解いた画面情報を作成した。これは図様の文章化によって、絵図の内容検索を可能とする試みである。その後、このデータベースには、3D地図ソフトによる荘園現地空間の復元図や空中写真の情報を付加し、更新を重ねている。

2011年度には、絵図読解に欠かせない地理情報を史料編纂所歴史情報処理システム(SHIPS)搭載データと連動させながら蓄積していくシステムを構築した。これは、任意に抽出した史料中の地名情報を、SHIPSデータベースに対してAPIを介して照会することで、出典などのメタデータを自動的に付与して蓄積していくシステムである。現在、荘園絵図模本・平安遺文・鎌倉遺文・大日本古文書・大日本古記録・金石文拓本史料の6つのデータベースを連携させており、将来的なデータの活用を目指している。

(6)残された課題と今後の展望

『日本荘園絵図聚影釈文編』の中世二、中世三の刊行を実現することが最大の課題である。また原本調査過程において判明した彩色、料紙の継ぎ方などに関する詳細な所見や解釈の全てを『釈文編』に記述することは困難であるが、それをどのようにして、精確にかつ適切な方法で公開するかも課題である。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

本所出版物：

東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影釈文編一 古代』(2007年9月)

東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影釈文編二 中世一』(2016年4月)

論文・史料紹介など：

西田友広「東大寺宝珠院所蔵絵図から見た鎌倉時代後期の尼崎地域」(『東京大学史料編纂所研究紀要』27、2017年)

村岡ゆかり「荘園絵図の彩色材料調査報告」(東京大学史料編纂所研究成果報告2016-2『画像解析と歴史・地理情報の高度活用に基づく荘園絵図の総合的研究』、2016年)

井上聡「荘園調査成果の共有をめざして」(海老澤衷他編『中世の荘園空間と現代』、勉誠出版、2014年)

井上聡「金石文拓本史料データベースにおける地理情報蓄積システムの活用」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』65、2014年)

井上聡「荘園絵図調査の実践から」(『民衆史研究』85、2013年)

井上聡「荘園絵図模本データベースと地理情報蓄積システムの連携について」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』59、2012年)

井上聡「薩摩国日置北郷中分絵図に関する現地調査と考察」(東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6『画像解析とフィールドワークに基づく荘園絵図情報システムの構築』、2012年)

井上聡「地理情報蓄積システム」の構築と荘園絵図模本DBにおける利活用について」(東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6『画像解析とフィールドワークに基づく荘園絵図情報システムの構築』、2012年)

高山さやか「薩州日置郡吉利郷惣絵図」高精細デジタル撮影による研究資源化に関する報告(東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6『画像解析とフィールドワークに基づく荘園絵図情報システムの構築』、2012年)

伊藤瑠美「豊前国野仲郷絵図断簡」「豊前国宇佐宮放生会次第図」調査報告(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』53、2011年)

村井祐樹「崇福寺所蔵『東寺寺内敷地図』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』21、2011年)

井上聡「『薩摩国日置北郷絵図』現地調査報告概報」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』48、2010年)

西田友広「東京大学史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベースの改良について」(科研報告書『荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究』、2008年)

西田友広「『伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図』に関する調査について」(科研報告書『荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究』、2008年)

口頭発表など：

井上聡「地理情報蓄積システムの構築とSHIPS-DBによる活用」、東京大学史料編纂所共同研究拠点と歴史情報シンポジウム「史料情報の新たな発信」、東京大学史料編纂所、2015年1月

西田友広「下地中分絵図の世界」、湯梨浜町歴史講座(湯梨浜町教育委員会・史料編纂所共催)、鳥取県湯梨浜町中央公民館、2012年3月

西田友広「荘園絵図プロジェクトの活動と課題」、東京大学史料編纂所シンポジウム「研究と情報の資源化」、東京大学山上会館、2010年1月30日、

石川徹也・林譲・井上聡・西田友広・村井祐樹・高橋敏子「『東郷荘総合情報閲覧システム』の公開

鳥取県立鳥取西高等学校・同東高等学校公開授業 2007年11月7日・9日

鳥取大学地域学部錦織勉ゼミ授業 2007年11月7日

鳥取県東部地区高等学校地歴公民科教育研究会発表 2007年11月9日

鳥取県民カレッジ連携講座「デジタル画像システムでたどる湯梨浜町の歴史—東郷荘絵図から750年—」、湯梨浜町ハワイアロハホール、2007年11月8日

林譲「中世の慧日寺について—東京大学史料編纂所データベースの紹介を兼ねて—」、慧日寺資料館歴史講座、2007年9月

青山宏夫「古地図研究の方法と課題」、画像史料解析センター開設10周年記念研究集

会「画像史料研究の成果と課題」、東京大学山上会館、2007年6月
西田友広「荘園絵図プロジェクト」、同上

研究集会・ワークショップ：

荘園絵図に基づく地理情報システム構築の研究会（科研費基盤研究(A)「画像解析とフィールドワークに基づく荘園絵図情報システムの構築」による）、東京大学史料編纂所、2010年12月21日

『日本荘園絵図聚影 釈文編』中世ワークショップⅢ、東京大学文学部、2007年10月

外部資金：

科学研究費補助金 基盤研究(A)、16202011、「荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究」、2004～2007年度、林譲

科学研究費補助金 基盤研究(A)、20242012、「画像解析とフィールドワークに基づく荘園絵図情報システムの構築」、2008～2011年度、高橋敏子

科学研究費補助金 基盤研究(A)」「」、24242020、「画像解析と歴史・地理情報の高度活用に基づく荘園絵図の総合的研究」、2012～2015年度、榎原雅治

データベース等：

「史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース」

「地理情報蓄積システム」

4 内務省引継地図および関連史料についての研究プロジェクト

<p>(1) プロジェクト名称 内務省引継地図および関連史料についての研究</p>
<p>(2) 実施年度 2000 年度～2009 年度</p>
<p>(3) 研究組織 代表：杉本史子 所内メンバー：井上聡、近藤成一、杉森玲子、横山伊徳 共同研究員：小野寺淳（茨城大学教授）</p>
<p>(4) 研究目的・概要 分析・整理対象：本所所蔵「旧内務省引継地図」および関連絵図・文書 文書群の性格は、杉本「東京大学史料編纂所所蔵「内務省引継地図」とその公開について」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』6号）に記述した。</p>
<p>(5) 研究経過と成果（主として 2007～2009 年度） 1. 2007 年度以前に、科学研究費補助金基盤研究（C）（2）『内務省地理局における地図蓄積＝管理構造の復元的研究』（代表者・横山伊徳、2002－03 年度）、および基盤研究（C）（1）「八瀬童子の空間認識と歴史意識—日常・非日常的空間への歴史地理学的アプローチ」（代表者・小野寺淳、2003－04 年度）と共同研究を行い、内務省引継地図の史料群としての性格の解明や、個々の地図についての現地調査・原本調査を含む詳細な分析に取り組んできた。 2. 1 による 5 年間の成果をふまえ、対象を全国規模にまで広げた、基盤(A)「地図史科学の構築—前近代地図データ集積・公開のために」（代表者・杉本、2006－2008 年度）および基盤研究(A)「『地図史科学の構築』の新展開—科学的調査・復元研究・データベース—」（研究代表者：杉本史子、2009－2011 年度）をスタートさせた。 3. 内務省引継ぎ地図の整理・内容分析・比較分析を基礎として、絵図学一般へと発展させる基礎づくりを行った。これらの成果を発展させ、杉本史子他編『絵図学入門』（東京大学出版会、2011 年）、“Cartographic Japan: A History in Maps”, edited by Karen Wigen, Sugimoto Fumiko, and Cary Karacas (The University of Chicago Press, 3. 2016, 336 pages, 111 color plates, 1 table) を刊行した。</p>
<p>(6) 残された課題と今後の展望 これまで行った陸図のみならず、海図分析が課題として残されている。本研究終了後の海図整理・分析については、「赤門書庫旧蔵地図」PJ 記事を参照のこと。</p>
<p>(7) 関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧 ここでは、2007 年度以降についてのみ記述する。この期間は、基盤(A)「地図史科学の構築—前近代地図データ集積・公開のために」（代表者・杉本、2006－09 年度）の一環として、研究活動を行った。 <2007 年度></p>

1. 原本調査 本プロジェクトは2006年度より、基盤(A)「地図史科学の構築—前近代地図データ集積・公開のために」(代表者・杉本史子、2006-09年度)の一環として、研究活動を行ってきたが、その中で、東京文化財研究所メンバーとの共同研究の準備を行ってきた。当年度は、それをふまえて、同メンバーを上記科研メンバーとして、山口県文書館収蔵、萩藩の国絵図・地下上申図(2007年11月)・岡山大学附属図書館収蔵、岡山藩国絵図(2008年1月)で、地図に対する初めての科学的調査(蛍光X線分析法・可視反射スペクトル測定法)を実施した。また、9月17-20日ライデン大学図書館・国立民族学博物館調査(基盤(B)「ライデン大学所蔵シーボルト国絵図の地図史研究」(代表:小野寺淳)と合同調査)を行った。これらについては、ウェブ上で概要を速報している。また、成果については、論文(掲載決定)として公開する予定である(→2008年度記事参照)。なお、岡山大学調査から、荒井経・東京学芸大学准教授が研究協力者として参加した。

2. データ蓄積 ○全国所在アンケート(2004年度に本プロジェクトで実施した全国の史料所蔵機関に地図所蔵についてのアンケート)公開のための準備作業として、回答館への公開画面の確認了承取り付け、7月の公開研究集会での報告、メンバーによる検討会を開催し、検索上の不具合を改善した。○地図目録班では、史料群データとして全国の元禄国絵図担当藩史料情報の蓄積を行い、公開研究集会で報告した。○全国地図情報データ班では、全国の地図所蔵館がどのような画像公開をおこなっているかについての情報をまとめ、公開研究集会で報告した。○本年度までに蓄積したデータ概数は、地図データ(図録・自治体史・地図集など)約9000件、論文データ(地図・色料)約3600件、史料群データ約500件である。

3. 研究 7月7・8日に公開研究集会「歴史のなかの地図Ⅱ 地図—知の交差点」を開催した(東京大学経済学研究科棟)。メリ・エリザベス・ベリ氏(カリフォルニア大学)「京都図の思想—記号と世界」、中村雄祐氏(東京大学)「認知の道具としての地図」・同コメント佐藤健二氏(東京大学)、鳴海邦匡氏(大阪大学)「コンパスにみる近世日本の測量術の画期」・同コメント 佐藤賢一氏(電気通信大学)、杉本史子(東京大学)「構造体としての地図—国絵図」、野積正吉氏(射水市新湊博物館)「近代形成期の国絵図—加賀藩の事例を中心に—」および2の成果報告を行った。

<2008年度>

1. 東京大学史料編纂所ホームページ(下記)より、「古地図・絵図所在情報アンケートデータベース」公開を開始した。<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/collaboration/fruits.html>。また、東京大学・茨城大学・京都府立大学において、刊行物収載の地図情報・地図関係論文情報のデータ3338件を入力した。

2. 絵図原本調査:2008年9月9日・10日(調査メンバーのべ32人)、2009年1月14日・15日(調査メンバーのべ34人)諸分野の専門家による大規模調査団を組織して、国立公文書館幕府献上図についての基礎データを収集し

た。

3. ①公開研究集会開催「近世社会と地図作成」(2008年7月11、東京大学山上会館、小関悠一郎氏「絵図の伝来と史料群—元禄国絵図関連史料について—」、渡辺理絵氏「描写内容からみる城下町絵図の特徴と今後の研究の可能性」、杉森玲子氏「京都・六条寺内の成立と絵図」、②シンポジウム「歴史の中の地図Ⅲ 近代国家形成と地図作成—比較史的視点から」(2008年7月12日、於東京大学山上会館、島津俊之氏「内務省地理局の地図作製と国土掌握—近代日本における官庁地理学(Official Geography)の一実践—」、ディスカサント山田俊弘氏、飯島明子氏『『地図がつくったタイ』とタイ史の見方』、ディスカサント：吉江貴文氏)を開催し、諸分野の研究者と絵図についての意見交換を行った。

4. 以上の文理融合・諸分野共同の研究成果をふまえ、『歴史学研究』841号・842号特集「世界のなかの近世絵図(1)(2)」(2008年6月・7月号)に、本共同研究メンバー論文10本を公開した。

.....
2009年度より科学研究費補助金・基盤研究(A)『『地図史料学の構築』の新展開—科学的調査・復元研究・データベース—』(研究代表者：杉本史子、2009～2011年度)の一環として研究活動を行った。

<2009年度>

1. 2006年度以来蓄積してきた、刊行物収載地図情報を検索する『前近代地図情報DB』、東京大学史料編纂所蔵近世近代出版図データ検索『印刷図DB』の入力・検索システムをアクセス・ランタイムで構築した。
2. 2009年5月28・29日、国立公文書館所蔵天保国絵図(薩摩国・備前国・下総国)、12月3・4日、天保備前国絵図(勘定所本・紅葉山本)について科学的調査(蛍光X線分析法・可視反射分光スペクトル測定法)を行った。
3. 2010年2月24～26日、大阪商業大学商業史博物館所蔵「河内国茨田郡藤田村文書」の村絵図の科学的調査を行った。
4. 韓国における絵図調査のための予備折衝を、ソウル大学・韓国国立博物館・ソウル市立博物館・釜山古地図研究会に対して行った。
5. 2009年8月26～7日岡山大学附属図書館において、国絵図復元研究に向けて、復元対象図の最終調査を行った。2010年3月9日東京大学において公開研究集会「復元図制作手順の検討」を行い、下図用紙制作、トレース、本紙への肌裏打ちなど制作準備を行った。
6. 2009年7月18日、東京大学山上会館において、シンポジウム「歴史のなかの地図Ⅳ 政治と文化 第1部 「文化の中の空間表現」(報告者：イエール大学博士課程・ロバート=ゴリー氏、京都府立大学講師・上杉和央氏、東京学芸大学・准教授荒井経、第2部 「政治と空間—江戸城」(講演者：国学院大学栃木短期大学教授・深井雅海、神奈川大学・教授西和夫氏)を開催した。

7. 研究成果の一部を盛り込み、『絵図学入門』執筆を行った（2011年、東京大学出版会より刊行）。

.....

研究成果のデータベース公開

・東京大学史料編纂所「所蔵史料目録」中の「特殊蒐書、内務省引継地図」目録および解題をインターネット公開している。

<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>

・東京大学史料編纂所「古地図・絵図所在情報アンケートデータベース」
2004年度に実施した、全国の史料所蔵機関所蔵の地図情報を集約したデータベース。
東京大学史料編纂所の共同研究成果のページより公開している。

<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/collaboration/fruits.html>

5 長篠合戦図屏風プロジェクト

(1)プロジェクト名称 長篠合戦図屏風プロジェクト
(2)実施年度 2010年度～2016年度（継続中）
(3)研究組織 代表：金子拓 メンバー：黒嶋敏／村岡ゆかり（2013年度より）／藤原重雄（2016年度より） 共同研究員：白水正（犬山城白帝文庫）／高橋修（茨城大学）／原史彦（徳川美術館） ／藤本正行（國學院大学）／津田卓子（名古屋市博物館・2011年度より）／阪野智啓 （愛知県立芸術大学・2016年度より）／薄田大輔（徳川美術館・2016年度より）／三宅秀和（群馬県立女子大学・2016年度より）
(4)研究目的・概要 <p>『大日本史料』第十編において、2019年度刊行予定の第30冊が天正3年5月21日の長篠の戦い当日条にあたるため、それに向け史料調査・検討を進めるなかで、長篠合戦図屏風を始めとする長篠の戦いに関係する画像史料の調査・検討も課題のひとつとなった。</p> <p>そこで本プロジェクトでは、他の外部資金による共同研究と協力しながら、長篠の戦いを中心とした戦国合戦に関する画像史料の調査・検討を目的とし、国内各所蔵機関に伝来されている「長篠合戦図屏風」ほか合戦図屏風・合戦図の熟覧調査、史料編纂所が所蔵する「落合左平次道次背旗」（以下「背旗」と略す）に代表される長篠の戦い関係画像史料の調査・研究を進めている。</p>
(5)研究経過と成果 <p>本プロジェクトに関連する他の外部資金としては、史料編纂所共同利用・共同研究拠点における特定共同研究「関連史料の収集による長篠合戦の立体的復元」（2010～15年度）、同特定共同研究「戦国合戦図の総合的研究」（2016～18年度予定）、科学研究費補助金・基盤研究(B)「中世における合戦の記憶をめぐる総合的研究—長篠の戦いを中心に—」（2012～15年度）がある（いずれも研究代表者金子）。</p> <p>研究は次の三つの柱で進めている。①「長篠合戦図屏風」の熟覧調査、②「背旗」に関する調査、③合戦図屏風・合戦図（絵図・地図）の熟覧・調査。</p> <p>①については、国内に所在する「長篠合戦図屏風」について多くのメンバー参加のうえで熟覧することにより、同屏風に関する問題点・知識の共有をはかった。閲覧したのは以下のとおり。徳川美術館所蔵屏風（2010・2014年度）、名古屋市博物館所蔵屏風（2010年度）、犬山城白帝文庫所蔵屏風（2011・2015年度）、中津城所蔵屏風模本（2011年度）、大阪城天守閣所蔵屏風（2012年度）、東京国立博物館・豊田市郷土資料館所蔵屏風（2013年度）、松浦史料博物館所蔵屏風（2014年度）。</p> <p>ここに掲げた各屏風については、このプロジェクトや共同研究・科研の成果である</p>

金子編『いくさの記憶 長篠合戦の史料学』（勉誠出版、2018年刊行予定）のなかで詳細な解説を掲載する予定である。

以上の調査を踏まえ、とくに研究がこれまで十分になされていなかった東京国立博物館所蔵屏風（下絵）について研究を進め、これが徳川将軍家の注文により幕府奥絵師木挽町狩野家において制作された可能性が高いことを明らかにした。この研究をもとに、史料編纂所史料保存技術室（模写室）において、2014年度より想定彩色模写の制作が開始された。

東京国立博物館所蔵の原本はほぼ白描・無着色状態であるため、この模写制作にあたり、最終的に着色されたとしたらどのようなようになっていたのかを想定するための調査・研究を進めることとし、本所金子・藤原・村岡、共同研究員津田・阪野・薄田・三宅各氏を中核としたグループにより、木挽町狩野家（狩野養信前後）により制作された作品の熟覧をおこなっている。

熟覧したのは、永青文庫所蔵「胡蝶船遊図」（2015年度）、サントリー美術館「四季耕作図屏風」・板橋区立美術館所蔵狩野家作品（2016年度）である。さらに同様の模写制作をおこなっている名古屋城本丸御殿・愛知県立芸術大学の模写工房の見学もおこなった（2016年度）。

これらの調査・見学と合わせ、2015年度より模写のための研究会を複数回開催し、情報の共有と模写の方向性の確認をおこなっている。2017年度からは、作品中に描かれる合戦の様態について、武士・馬の描き方についての知識を共有するための研究会を開催し、今後の参考とした。

②については、「落合左平次道次背旗」の熟覧（2010年度）、落合信幸氏所蔵落合家旗指物の調査（2011年度）をおこなった。そこで収集・撮影された史料を検討した結果、本所所蔵の「背旗」は、落合家初代道次の制作にかかる（16世紀末～17世紀初期）ことが明らかとなった。

この研究成果を踏まえ、2015年度に本所所蔵「背旗」の修理がおこなわれた（修理経費は寄付金）。修理の過程で、「背旗」には落合家の文献に記されたとおりの血痕とおぼしき染みがあること、また、従来掛幅装のため表面しか見ることができなかったが、その裏側にも同様の図像が描かれていることなどが判明した。

「背旗」は表裏両面を鑑賞できるように衝立状に仕立てられ、研究成果と合わせ、2016年に国立歴史民俗博物館・新城市設楽原歴史資料館において展示された。

③については、①の調査の過程で、比較対象となる他の合戦図屏風の熟覧をおこなってきたほか、①の延長線上で、合戦図屏風だけでなく、いくさに関わる図像として合戦図（地図・絵図）にも対象を広げ、とくに2017年度から重点的な調査を開始している。このなかでは、史料編纂所所蔵模写中、および特殊蒐書・内務省引継地図に収められた合戦図について調査をおこない、その情報資源化を目指している。

(6)残された課題と今後の展望

「長篠合戦図屏風」については、模写制作が進められている東京国立博物館本をめ

ぐって、木挽町狩野家における作品の描き方についての研究をさらに進め、いっぽうで、合戦図屏風に武士・武器・馬、さらに戦い方の態様がいかに描かれているのか、先行作品からの引用が認められるのかといった点に注意しながらその特徴をつかむための検討をおこなってゆく必要がある。

東京国立博物館には、「長篠合戦図屏風」と一対になる予定で制作が進められていた「長久手合戦図屏風（下絵）」も所蔵されており、これは2016年度に調査をおこなった。「長篠合戦図屏風」の史料的性格や図像の典拠を明らかにするためには、対になる「長久手合戦図屏風」の調査研究も不可欠であり、今後はこちらの検討も進める予定である。

史料編纂所所蔵の合戦図類については、情報整理を進め、必要なものについては撮影をおこない、本所データベースから公開することを目標にしている。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

著書・論文

金子拓「鳥居強右衛門の虚像と実像」(『Library iichiko』110号、2011年)

金子拓「落合家所蔵の旗指物と「落合左平次道次背旗」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』56、2012年)

黒嶋敏・高橋修(共著)『関ヶ原合戦の深層』高志書院(谷口央編)、2014年

金子拓「島津家文書「大坂御弓箭ノ時御城ノ絵図」について―大坂冬の陣の一齣―」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』70、2015年)

高島晶彦・山口悟史・市宮景子・金子拓「東京大学史料編纂所所蔵「落合左平次道次背旗」の保存修理について」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』71、2015年)

金子拓「東京国立博物館長篠合戦図屏風について」(同上)

金子拓「史料としての戦国合戦図屏風」(五味文彦監修『歴史文化遺産 戦国大名の遺宝』山川出版社、2015年)

金子拓・高橋修・白水正・津田卓子・原史彦(共著)『いくさの記憶 長篠合戦の史料学』勉誠出版(金子拓編)、2018年予定

白水正「長篠合戦図屏風の人名表記について」(『公益財団法人犬山城白帝文庫研究紀要』10、2016年)

白水正「長久手合戦図屏風の人名表記について」(同上11、2017年)

東京大学史料編纂所編纂『大日本史料』第十編之二十九(2017年)

口頭報告

金子拓「落合家に伝わる鳥居強右衛門磔殺図について」(新城市設楽原歴史資料館「奥平展」講演会、2012年11月)

金子拓「上杉氏にとっての長谷堂合戦の記憶」(米沢市上杉博物館2013年特別展『戦国のメモリー 合戦図屏風と上杉の記録と』公開講演会、2013年6月)

金子拓「長篠合戦をめぐる史料収集・研究およびその利用について」(東京大学史料編

纂所 [共同研究拠点と歴史情報] シンポジウム「史料情報の新たな発信」、2015年1月)

金子拓「様変わりした落合左平次道次背旗(鳥居強右衛門磔刑図)について」(新城市設楽原歴史資料館開館20周年連続講座、2016年10月)

研究集会

シンポジウム「長篠・設楽原の戦いを考える」(新城市、2016年2月)

展覧会

新城市設楽原歴史資料館「奥平展—長篠から中津へ—」(2012年)

上杉博物館特別展「戦国のメモリー—合戦図屏風と上杉の記録と—」(2013年)

熊本県立美術館「細川コレクション 信長からの手紙」(2014~15年)

国立歴史民俗博物館特集展示「「もの」からみる近世」(2016年)

新城市設楽原歴史資料館開館20周年記念特別展「鳥居強右衛門」(2016年)

外部資金

史料編纂所共同利用・共同研究拠点：特定共同研究「関連史料の収集による長篠合戦の立体的復元」、2010~15年度、金子拓

同特定共同研究「戦国合戦図の総合的研究」、2016~18年度予定、金子拓

科学研究費補助金・基盤研究(B)(課題番号24320123)「中世における合戦の記憶をめぐる総合的研究—長篠の戦いを中心に—」、2012~15年度、金子拓

6 東アジアにおける「倭寇」画像の収集と分析プロジェクト

(1)プロジェクト名称 東アジアにおける「倭寇」画像の収集と分析
(2)実施年度 2011年度～2015年度
(3)研究組織 代表：須田牧子 メンバー：久留島典子・保谷徹・藤原重雄・ 榎原雅治（2013年度～）・黒嶋敏（2014年度～） 共同研究員：黄栄光（中国科学院自然科学史研究所） 板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所、2014年度～） 村井章介（立正大学文学部、2014年度～） 鹿毛敏夫（国立新居浜工業高等専門学校→名古屋学院大学国際文化学部、2014年度～） 山崎岳（京都大学人文科学研究所、2014年度～）
(4)研究目的・概要 <p>本所所蔵「倭寇図巻」は倭寇を描いた唯一の着色の絵としてつとに知られ、教科書などにも多く用いられている。ところが近年、中国国家博物館には「抗倭図巻」と名付けられた絵巻が所蔵されており、他にも倭寇を描いた絵画史料が所蔵されていることが判明した。本研究では、中国国家博物館の許可と協力を得て、第一に「抗倭図巻」と「倭寇図巻」の調査・分析をすすめ、二つの絵巻を比較検討して、その史料的性格を明らかにするとともに、国家博物館が所蔵する倭寇関連の絵画史料の調査をすすめ、近世中国において「倭寇」がいかなるものとして記憶されたのかという問題について検討することを目的とした。併せて、国内に伝来する明代日本研究書などに描かれる「日本人」・「倭人」・「倭寇」の画像を集積し、中近世東アジアにおける「倭寇」画像の網羅的な収集を試みることにした。</p> <p>近年、東アジア海域研究の進展は目覚ましいものがあり、文献資料の掘り起こしも進んできている。しかしながら、画像史料、それも倭寇関係のものとなると、きわめて限られているのが現状である。そうしたなかで「抗倭図巻」の発見は重要である。2010年度の予備調査により、「倭寇図巻」と「抗倭図巻」は画面構成がほぼ同一であり、形状の面からも親近性が高いことが判明した。さらに「倭寇図巻」の高精細デジタル画像・赤外線デジタル画像撮影の結果、従来知られていなかったり読めなかったりした文字を発見・解読することが出来た。同様の成果が「抗倭図巻」からも期待された。本研究では、最近の技術の向上によって可能になったこうした成果を活かし、二つの絵巻自体の解読を進めるとともに、親近性の高い二つの絵巻の存在をどう理解するかを歴史的な文脈の中で検討することを目的とした。</p>
(5)研究経過と成果 2011年度には、研究会を3回開催し、中国国家博物館にて「太平抗倭図」等の調査を

行なった。2012年度には、中国国家博物館にて「平番得勝図」等の調査を行ない、また中国浙江省において関連史跡の踏査を行なった。2013年度には、研究会を2回開催し、中国国家博物館で「抗倭図巻」の再調査、山東博物館で倭寇関連図像の調査、毛利博物館で関連史料の調査・撮影を行なった。2014年度には、研究成果を踏まえ、これからの研究の基礎となる図録（『描かれた倭寇 「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』）を刊行し、2015年度には、研究会を1回開催するとともに、論集（『「倭寇図巻」「抗倭図巻」をよむ』）の刊行を進め、併せてこの間の研究概要と資料をまとめた報告書を作成した。

「倭寇図巻」が本所に入架されたのは20世紀初頭であり、入架の際に、その絵の内容から「倭寇図巻」と名付けられた。以降1930年に辻善之助が、1974年に田中健夫と川上涇が、それぞれ解説を執筆しているが、それ以来、史料学的検討はなされてこなかった。2010年の赤外線撮影による文字の発見は、「倭寇図巻」研究の必要性を一気に認識させ、中国国家博物館所蔵「抗倭図巻」の紹介は、両図巻の歴史的な位置づけを考えるうえで複合的な視座を提供した。これらの成果を前提として、本プロジェクトでは、専門分野を異にする研究者による共同研究を進めた。プロジェクトとしては5年、予備調査を含めると6年にわたる研究の結果、両図巻は、蘇州片と呼ばれる売絵として明代に工房制作されたものであり、その原型となった絵巻（原倭寇図巻）は嘉靖倭寇の鎮圧者として名をはせた胡宗憲の「戦功図」として描かれたのであろうと論じられるに至った。またこの過程で原倭寇図巻の注文主と目される胡宗憲と、それと深く関係した王直・大友氏使節団の動向などについても考察が深められた。さらに中国国家博物館所蔵「太平抗倭図」や木版画の倭寇図などが調査紹介されたことで、「倭寇」画像が想像以上の広がりをもつことが認識されるようになった。これら「倭寇図」を受容する社会的土壌の検討も試みられ、倭寇小説ともいべきジャンルが存在したことも併せて明らかにされた。

「倭寇図巻」研究は対象史料の知名度の高さから注目を集めやすく、この間の研究成果は随時報道され、世間の耳目を集めることとなった。またオープンキャンパスや史料展示会などにおいて、本プロジェクトの研究紹介がなされる機会も多かった。本プロジェクト研究の過程で史料研究を行なった本所所蔵「蔣洲咨文」は、2016年重要文化財指定を受けた。ほかに特筆すべき点として、従来歴史史料としてのみ扱われてきた「倭寇図巻」が、明代の美術史の中でも取り扱われるようになったことが挙げられる。とりわけ「清明上河図巻」との造型の類似性が注目され、2015年大和文華館でおこなわれた「蘇州の見る夢—明・清時代の都市と絵画」においては、明末の成熟した絵画市場を代表する作品と位置づけられて出品された。なお本研究の内容は中国国家博物館の紀要で随時紹介され、中国でも注目されるに至った。2013年には新聞（『光明日報』）で研究概要が大きく紹介され、中国国家博物館における模範的成果として論集を出版することが2016年に決定された（2017年刊行見込）。

(6)残された課題と今後の展望

下記に示したように、研究成果については図録・論集としてまとめ、赤外線撮影による成果や未公開史料画像などについても図録・論集にカラーで掲載し、今後「倭寇図巻」

研究に必要な史料画像をみながら、この間の研究成果を一覧できるよう整え、プロジェクトとしては一応の完結を見ている。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

研究集会

- ・2011/10/18 「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」 *参加者約 90 名
須田牧子 「『蒋洲咨文』について」
鹿毛敏夫 「『抗倭図巻』『倭寇図巻』と大友義鎮・大内義長」
陳 履生 「『太平抗倭図』の芸術上の特徴」
- ・2011/12/10 「倭寇と倭寇図像をめぐる研究集会—美術史の立場から」 *参加者約 40 名
〈趣旨説明〉板倉聖哲
〈報告〉馬雅貞 「戦勲と宦蹟」
〈コメント〉山崎岳
- ・2013/04/02 「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」 *参加者約 70 名
須田牧子 「はじめに～倭寇図巻研究の現在」
山崎 岳 「乍浦・沈荘の戦い再考：『抗倭図巻』の虚実にせまる」
朱 敏 「『平番得勝図巻』考略」
陳 履生 「『平番得勝図巻』における標題」
- ・2014/01/15 「倭寇と倭寇図像をめぐる研究集会—美術史の立場から」 *参加者約 45 名
須田牧子 「特定共同研究倭寇プロジェクト、3年間の成果」
板倉聖哲 「蘇州片と倭寇図巻・抗倭図巻」
関 周一 「総括コメント」
- ・2015/04/20 「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」 *参加者約 40 名
遊佐 徹 (岡山大学) 「小説に“描かれた”倭寇—明清倭寇小説概論」
陳 履生 (代読：黄栄光) 「版刻の使い道—明代典籍のさし絵にある倭寇図の研究」

刊行物 *主要なもののみ。『「倭寇図巻」「抗倭図巻」を読む』に再録されたものを除く。

- ・須田牧子 「史料・文献紹介『倭寇図巻』」(『日本史の研究』234号、2011年9月)
- ・『中国国家博物館館刊』2011年第2期
陳 履生 「紀功与記事：明人《抗倭図巻》与《倭寇図巻》」
須田牧子 「《倭寇図巻》再考」
朱 敏 「解説明人《抗倭図巻》—兼談与《倭寇図巻》的關係」
- ・『中国国家博物館館刊』2012年第1期
陳 履生 「《太平抗倭図》的芸術特点」
須田牧子 「蒋洲咨文浅探」
鹿毛敏夫 「《抗倭図巻》、《倭寇図巻》和大友義鎮、大内義長」
- ・『中国国家博物館館刊』2013年第6期
陳 履生 「从“標題”看《平番得勝図巻》」
朱 敏 「《平番得勝図巻》考略」

須田牧子「《倭寇図巻》研究的現状」

山崎 岳「“乍浦、沈荘之役” 重考:《抗倭図巻》虚実的探討」

- ・村井章介「解説」(田中健夫『倭寇』講談社学術文庫、2012年1月)
- ・須田牧子「倭寇図巻研究の現在」(『画像史料解析センター通信』59、2012年10月)
- ・鹿毛敏夫「倭寇と戦国大名の関係」(同著『大航海時代のアジアと大友宗麟』(海鳥社、2013年2月)
- ・東京大学史料編纂所編『描かれた倭寇「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』(吉川弘文館、2014年10月)
- ・須田牧子「「倭寇図巻」の図像学」(九州国立博物館編『戦国大名』、2015年4月)
- ・須田牧子編『東京大学史料編纂所倭寇図巻プロジェクト』(私家版、2016年3月)
- ・須田牧子編『「倭寇図巻」「抗倭図巻」をよむ』(勉誠出版、2016年4月)

その他口頭報告

- ・須田牧子「倭寇図巻と抗倭図巻」(北九州市立自然史・歴史博物館、2012年1月)。
- ・鹿毛敏夫「日中の倭寇絵巻と大内氏・大友氏」(九州史学研究会大会、2012年10月)
- ・KAGE Toshio「Relation between Japanese Warlords and the Wakou in the 1550's」(The Challenges of the GlobalHistory in Maritime Studies、Tsinghua University、Beijing、China、2012年11月)
- ・須田牧子「「倭寇図巻」研究の新展開」(神奈川県高等学校社会科部会歴史分科会春季研究大会、2015年3月)

展覧会

- ・北九州市立自然史・歴史博物館「大内文化と北九州」(2012/1/2～2/12)
「倭寇図巻」原本・「抗倭図巻」レプリカを出陳
- ・大和文華館「蘇州の見る夢—明・清時代の都市と絵画」展(2015/10/10～11/15)
「倭寇図巻」原本を出陳

外部資金

- ・共同利用・共同拠点特定共同研究「本所所蔵品ならびに中国国家博物館所蔵品にみる「倭寇」像の比較研究」(2011～2013年度、代表：須田牧子)
- ・科学研究費補助金基盤研究A「ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究」(課題番号 23242039、2011～2013年度、代表：保谷徹)
- ・科学研究費補助金基盤研究S「マルチアーカイヴァル的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」(課題番号 26220402、2014～2018年度、代表：保谷徹)

画像公開

本研究により蓄積された画像は、所蔵史料目録データベース・Hi-CAT Plus にイメージ画像が登録され、本所所蔵史料についてはウェブでも公開されている。中国国家博物館所蔵史料については閲覧室での限定公開である。

7 近世都市図解析プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 近世都市図解析プロジェクト</p>
<p>(2)実施年度 2013年度～2016年度（継続中）</p>
<p>(3)研究組織 代表：山口和夫 メンバー：藤原重雄 共同研究員：杉森哲也(放送大学)・西山剛(京都文化博物館)</p>
<p>(4)研究目的・概要 多種多様に伝存する近世都市図のうち「洛中洛外図屏風」や古地図を主対象に、史料所在情報・図版公刊情報・作品展示情報・解説文献等の集約・蓄積・整理、出張調査、研究会合、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』への寄稿等、共同研究を進める。</p>
<p>(5)研究経過と成果 これまで岡山県立博物館、京都文化博物館、福島県立博物館、大松寺(横須賀市)、国際日本文化研究センター、肥前島原松平文庫所蔵史料（「洛中洛外図屏風」、同関連図屏風、近世京都関係古地図類）および個人蔵作品（屏風1件）の調査を実現した。 2015年初までの調査成果は、京都文化博物館特別展「京を描く一洛中洛外図の時代」（2015年）および同図録にも反映されている。</p>
<p>(6)残された課題と今後の展望 研究蓄積の薄い作品を選んで調査しているため、解析成果をとりまとめ、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』誌上等に寄稿・公表するまでに時間を要している。作業を継続し、成果公表の責を果たすよう努めたい。 「洛中洛外図」のような絵画作品の調査・撮影と画像情報蓄積の方法についても、試行中であり、何らかの方向性を見出し得ればと考えている。 検討すべき作品、新出する作品は尽きないので、条件の許すなかで作品調査を継続してゆきたい。</p>
<p>(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧 京都文化博物館特別展「京を描く一洛中洛外図の時代」2015年および同図録 山口和夫「細川忠利から土井利勝への屏風贈答」 『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』69、2015年4月 大塚活美「住吉具慶筆洛中洛外図の鴨川納涼について―一生類憐みとの関係―」 『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』76、2017年1月</p>

8 近世初期天下普請関係画像史料の蒐集・研究プロジェクト

(1)プロジェクト名称 近世初期天下普請関係画像史料の蒐集・研究
(2)実施年度 2015年度～2016年度（継続中）
(3)研究組織 代表：及川亘 メンバー：小宮木代良・佐藤孝之
(4)研究目的・概要 江戸幕府による江戸城や大坂城などの公儀普請は天下普請とされ、この助役は軍役として諸大名に広範に賦課されたので、幕藩体制の根幹に関わる問題として認識されてきた。従って『大日本史料』第十二編においても公儀普請に関連する綱文は大きな比重を占めてきたが、それに関連する画像史料はこれまで必ずしも十分に蒐集・研究されていない。本研究プロジェクトはそれを補い、今後の『大日本史料』編纂に役立てることを目的とする。
(5)研究経過と成果 2015年度は大坂城普請に出役した大名のうち、筑前福岡城主黒田家に関わる普請関係画像史料の未採訪史料二件の調査・撮影を行った。一件は、近年春日市奴国の丘歴史資料館の所蔵となった「佐藤恭敏家文書」に含まれる黒田家の大坂城普請に関連する絵図・指図類（大阪歴史博物館に長期貸出中）15点である。2013年に大阪歴史博物館の特別展「天下の城下町 大坂と江戸」に出陳され、広く知られるようになったものである。もう一件は、これも近年、丸亀市立資料館に寄託された「吉田文書」で、これは黒田家の塩飽島における石切場に関連して現地に残された史料群である。過去に神奈川大学常民文化研究所により調査され、同大学デジタルアーカイブでも史料情報が断片的に紹介されているが、今回石切場関係を中心に156点の調査・撮影を行った。 2016年度は大坂城普請に出役した大名のうち、豊後臼杵稲葉家に関わる普請関係画像史料として、臼杵市所蔵稲葉家旧蔵絵図（臼杵市文化財管理センター保管）を調査した。 調査した絵図3点（392号・393号・395号）の内、392号・393号は寛永5年の大坂城再築普請時の各大名の分担を示したもので、すでに『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』でも稲葉民部少輔一通の藩主在任期間（寛永5～同18）から寛永5年の普請図であることが指摘されているが、今回、普請箇所や各大名の担当箇所から寛永5年の普請図であることが確認できた。392号と393号で建物の描き方に精粗があるものの、392号の「稲葉民部少輔」の書き込みが朱書きであること以外に内容に異同はなかった。 また395号は目録上「大坂城図並寄手人数配（大坂冬の陣図）」とされているが、大坂城の内郭部分の書き込みから、作成途中の寛永5年の普請図に慶長19年の大坂冬の陣に関する注記が加えられたものであることが分かった。

(6)残された課題と今後の展望

江戸城・大坂城普請をはじめ、近世初期の幕府による城普請に関連する絵図・指図などの画像史料は全国の大名家史料の中に散在しているが、その所在状況についてはまだ全体像が把握できていない。また関連する文献史料の所在状況も平行して把握していかなければならない。まず、大坂城普請に関連する画像史料の調査に着手したが、予算上の制約もあり、年一・二箇所のみ史料調査にとどまっている。

そのため、本研究プロジェクトに関連して、科学研究費補助金を申請し、2017年度から4年計画で基盤研究(B)「近世統一政権の成立と天下普請の展開」(課題番号17H02382、代表及川)が採択されたので、それと連携して研究を進める予定である。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

・科学研究費補助金、基盤研究(B)、課題番号17H02382、近世統一政権の成立と天下普請の展開、H29～H32、代表及川亘

第2分野（画像史料）

9 古写真研究プロジェクト

(1) プロジェクト名称 古写真研究プロジェクト
(2) 実施年度 1997年度～2016年度（継続中）
(3) 研究組織 代表：保谷 徹 メンバー：谷 昭佳・高山さやか・箱石 大 共同研究員：高橋則英（元客員教授・日本大学）、吉田 成（東京工芸大）、田良島 哲（客員教授・東京国立博物館）。 （元共同研究員）：ペーター・パンツァー（ボン大学名誉教授） 研究協力者：宮田奈奈（オーストリア学士院近現代研究所）、田中里実（日本大学）、鳥海早喜（日本大学）、桑田恵理（日本大学）、金井明穂（日本大学）、川上力（九州産業大学）、吉岡誠也（佐賀大学）ほか。
(4) 研究目的・概要 古写真研究プロジェクトは、国内外の写真史料（古写真）を対象に調査・収集して研究を進めている。とくに出所・伝来の確かなコレクションを歴史学的手法によって総合的に調査し、テキストとモノ（写真史料）双方の史料学的解析によって、撮影者・被写体等の特定や撮影技術の解明をおこなうなど、新しい写真史料学の確立を目指している。収集した写真史料の画像は研究資源化をはかり、写真史料集の刊行や古写真DBやHi-CAT Plusへの搭載により、ひろく公開をはかっている。本プロジェクトでは、画像史料解析センターの基幹プロジェクトとして、複数の新しい研究テーマがつねに数年のサイクルで動き続けており、全体として持続的なプロジェクトとなっている。
(5) 研究経過と成果 ○ここ数年間の主な調査研究活動：これまでに佐賀藩鍋島家コレクション、伊豆菰山江川文庫コレクション、徳川宗家コレクション、何礼之助コレクション、高田屋嘉兵衛家コレクション、菊池海荘家コレクション、東京国立博物館ガラス原板コレクション、海外では、クレットマンコレクション（コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所寄託）、ブルガーコレクション（オーストリア国立図書館）、モーザーコレクション（オーストリア・カンマーホフ博物館寄託）、エシュマンコレクション（フランス個人蔵）、フォン・ブランデンシュタイン家コレクション（ドイツ在住フォン・シーボルト子孫）、アンペールコレクション（スイス・ヌーシャテル市民族誌博物館）、ナダールコレクション（フランス写真アーカイヴズ）などの調査・研究を実施した。

○**主な成果公表**：古写真研究データベース／画像史料解析センター通信での論文発表（過去10年：計24本）／写真集『フランス士官が見た近代日本のあけぼの』（コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所との共同研究、2005年）／『江川文庫古文書史料調査報告書（古写真）』（翌年重要文化財指定、2012年）／展示図録『日本を想う Imagine Japan』（スイス・ヌーシャテル民族誌博物館との共同研究＝現地展示会2014年開催を実現、2015年・横浜開港資料館企画展示「スイス使節団が見た幕末の日本」2014年に協力／写真集『日本近代化へのまなざし—葦山代官江川家コレクション—』（吉川弘文館、2016年）／アルフレッド・モーザー著、ペーター・パンツァー監修、宮田奈奈訳『明治初期日本の原風景と謎の少年写真家—ミヒャエル・モーザーの「古写真アルバム」と世界旅行—』（編集協力、洋泉社、2016年）／新聞報道多数。

○**研究会の実施**：2016年、国際研究集会「Photography at the South Kensington Museum」を開催（画像史料解析センター共催）：ヴィクトリア&アルバート博物館（V&A Museum, London）から、写真担当学芸員マルタ・ワイス氏（Dr. Marta Weiss）を招聘、ほか。

○**研究経費等**：画像史料解析センタープロジェクト経費（下記）に加え、科学研究費補助金（古写真科研および東アジア科研・海外S科研など）および三菱財団研究助成金、徳川財団寄付金、保谷徹寄付金などを財源に用いている。

(6) 残された課題と今後の展望

当面の課題としては、ヌーシャテル民族誌博物館との共同研究を、谷昭佳ら編著による古写真史料集として今秋発刊を予定。また、ブルガー&モーザーコレクションの写真史料集を2018年1月に出版予定。この写真展示を中心にした日墺修好150年記念展示を2019年秋に開催する準備を進めている。また、東京国立博物館との共同研究の成果は、同館において来春開催の特別展示に反映される予定である。このほか、整理中の菊池海荘関係史料のデジタルアーカイブ化を完了し、同じく調査中の徳川宗家コレクション、佐賀鍋島家コレクションとともに成果の公開を図る必要がある。

(7) 関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

研究成果一覧 2012～16年度のみ

- ・アルフレッド・モーザー著、ペーター・パンツァー監修、宮田奈奈訳『明治初期日本の原風景と謎の少年写真家—ミヒャエル・モーザーの「古写真アルバム」と世界旅行—』（古写真研究プロジェクト編集協力、洋泉社、2016年7月）
- ・保谷 徹「京都博覧会と市田左右太のガラス原板写真」『画像史料解析センター通信』第73号、2016年4月
- ・保谷 徹「徳川宗家所蔵古写真コレクション調査報告」『徳川記念財団会報』27、2016年6月
- ・保谷 徹「“Deux ans au Japon, 1876-1878, Journal et Correspondance de Louis Kreitmann, Officier du Génie” ; Collège du France, Institut des Hautes Études

- Japonaises, Paris, 2015. (コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所編『日本での二年間、一八七六～一八七八：工兵士官ルイ・クレットマンの日記と書簡』、パリ、二〇一五年) 『画像史料解析センター通信』第74号、2016年7月
- ・谷 昭佳「歴史学と写真—史料編纂所写真室の開設—」 『画像史料解析センター通信』第75号、2016年10月
 - ・遠藤楽子「東京国立博物館所蔵ガラス湿板写真原板の基礎的研究と壬申検査関係写真—「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」一般共同研究報告—」 『画像史料解析センター通信』第76号、2017年1月
 - ・谷 昭佳 (学会報告)「欧州での古写真=写真史料調査プロジェクト」(海外S科研公開研究会「東京大学史料編纂所のデジタル画像検索閲覧システムの現状と課題」2016年7月
 - ・鳥海早喜「徳川宗家所蔵古写真コレクション調査報告」 『画像史料解析センター通信』第69号、2015年4月
 - ・谷 昭佳「吉田東洋肖像写真」(巻頭図版) 同上
 - ・谷 昭佳「モーザー (Moser) コレクションについて (三)」 『画像史料解析センター通信』第71号、2015年10月
 - ・Toru HOYA; Le Role de la France dans la reforme de l'armee japonaise a la fin du Bakufu et au debut de la Restauration de Meiji,"Deux Ans au Japon, 1876-1878: Journal et Correspondance de Louis Kreitmann, Officier du Genie," Colleege de France, Institut des Hautes Etudes Japonaises, Paris, 2015.12月
 - ・谷 昭佳「フェリーチェ・ベアトの幕末明治初期写真の年次比定」 『画像史料解析センター通信』第72号、2016年1月
 - ・谷 昭佳 「吉田東洋肖像写真」(巻頭図版、解説) 『日本歴史』813号 (吉川弘文館、2016年2月)
 - ・江川文庫編・古写真研究PJ 編集協力：写真集『日本近代化へのまなざし—蕪山代官江川家コレクション—』(吉川弘文館、2016年3月)
 - ・保谷 徹「江川文庫調査と古写真コレクション」(同上)
 - ・谷 昭佳「日本写真史における中浜(ジョン)万次郎の位置とその周辺—江川家伝来写真を中心に—」(同上)
 - ・谷 昭佳「モーザー (Moser) コレクション写真について (二)」 『画像史料解析センター通信』65号、2014年4月
 - ・谷 昭佳 (巻頭図版)「明治8年頃の内山下町博物館第六列品館展示 モーザーコレクションガラス湿板写真ネガ」 同上
 - ・谷 昭佳「下岡蓮杖の最初期写真—在外写真コレクションを中心に—」 『画像史料解析センター通信』67号、2014年10月
 - ・谷 昭佳 (巻頭図版)「下岡蓮杖撮影の佐藤泰然肖像写真」 同上
 - ・谷 昭佳「幕末のアマチュア写真家たち—幕末期に日本を訪れた外交官・軍人・

- 宣教師『レンズが撮らえた外国人カメラマンの見た幕末日本Ⅱ』山川出版社、2014年11月、p74-81.
- ・谷 昭佳「中浜（ジョン）万次郎の写真活動とその周辺—江川家旧蔵（江川文庫）古写真を中心にして」『土佐史談』第257号、2014年12月、p62-79.
 - ・谷 昭佳・高橋則英：万次郎撮影の吉田東洋肖像写真につき記者発表（高知市、3月）
 - ・鳥海早喜「徳川宗家所蔵古写真コレクション調査・調査報告」『徳川記念財団会報』24、2014年12月
 - ・保谷 徹（研究報告）「オーストリア所在ガラスネガ原板の解析による写真史科学の試み—日本関係古写真調査の成果と課題」三菱財団研究成果報告会、2014年9月16日
 - ・Toru HOYA, Les circonstances politiques japonaises en 1864, annee de Conclusion du Traite d' amitie et de commerce nippon-suisse. "Imagine Japan" Musée d'ethnographie, Neuchatel, Switzerland 2015.
 - ・谷昭佳「モーザー（Moser）コレクション写真について（1）—月光写真と内田九一写真ネガ」『画像史料解析センター通信』62号、2013年7月
 - ・保谷徹「明治初年の横浜居留地写真を読む—オーストリア所在古写真調査報告①」『画像史料解析センター通信』62号、2013年7月
 - ・保谷徹「明治初年の回向院境内写真を読む—オーストリア所在古写真調査報告②」『画像史料解析センター通信』63号、2013年10月
 - ・谷昭佳「外国人写真家が撮った明治初期の日本」『歴史 REAL』6、洋泉社、2012年4月
 - ・谷昭佳「最初期ベアトアルバムの史料学的考察」『レンズが撮らえた F・ベアトの幕末』山川出版社 小沢武志・高橋則英＝監修 2012年11月
 - ・鉄道友の会 M・モーザー記録写真検討特定プロジェクト「M・モーザー記録写真検討報告書」『画像史料解析センター通信』60号、2013年1月
 - ・谷昭佳「高田家伝来横山松三郎・松蔵兄弟の写真史料の概要—北方歴史資料館所蔵資料について」『画像史料解析センター通信』60号、2013年1月、巻頭図版「清水台公考肖像湿板写真」とも
 - ・谷昭佳「日本関係初期ベアト（Beato）写真の史料学的研究」『画像史料解析センター通信』58号、2012年7月、巻頭図版「エメエ・アンベール（Aimee Humbert）古写真コレクション」とも
 - ・保谷徹「『オーストリアの写真家モーザー・コレクション展—ガラスネガから復元する明治初期の日本—』の開催について」、『画像史料解析センター通信』57号、2012年4月
 - ・保谷徹「明治初年の旧大名屋敷」『日本歴史』770号、2012年7月
 - ・保谷徹「古写真でよみがえる幕末維新の舞台」『歴史 REAL』7、洋泉社 MOOK、

2012年7月

- ・保谷徹〔講演〕「伊豆韮山江川文庫古写真コレクションについて」幕末史研究会、吉祥寺商工会館、2012年4月
- ・谷昭佳〔講演〕「ジョン万次郎撮影写真と江川家旧蔵写真コレクション」江東区ジョン万次郎の会、江東区、2013年2月

外部経費

科学研究費補助金基盤研究（C）「歴史資料としての湿板写真ガラス原板の調査と研究資源化の研究」研究分担者（研究代表者：谷昭佳、2016～18年度）

科学研究費補助金基盤研究（C）「独逸瑞三国における一九世紀日本古写真と日本認識素材の復原的研究」研究分担者（研究代表者：谷昭佳、2013～15年度）

三菱財団人文科学研究助成金研究「幕末維新期の在暁日本関係古写真・ガラスネガの総合的研究」（研究代表者：保谷徹、2011～13年度）

科学研究費補助金基盤研究（C）「一九世紀日本関係古写真の調査収集と解析による年次的研究」研究分担者（研究代表者：谷昭佳、2009～11年度）

構築したデータベースと収集画像データの公開

「古写真データベース」

「所蔵史料目録データベース」「Hi-CAT Plus」への画像登録

- ・何礼之関係史料コレクション（寄贈本）（「長崎唐通事何礼之関係史料」）
- ・高田屋嘉兵衛関係史料コレクション（寄託本）（「高田屋嘉兵衛家関係史料」）

10 画像史料による近世儀礼の空間構造と時間的遷移に関する研究プロジェクト

<p>(1) プロジェクト名称 画像史料による近世儀礼の空間構造と時間的遷移に関する研究</p>
<p>(2) 実施年度 2004 年度～2007 年度</p>
<p>(3) 研究組織 代表：小宮木代良 メンバー：山口和夫・荒木裕行 研究協力者：中川和明（学術研究支援員）</p>
<p>(4) 研究目的・概要</p> <p>画像史料による近世儀礼史料、とくに武家儀礼と公家儀礼のそれぞれについての画像史料を分析するための公開性・共有性の高い仕組みを検討し、そこから実現できる研究の方向性を考えた。具体的には、画像史料を扱う上で、公開手続き上の問題の少ない本所所蔵の近世儀礼史料を材料とし、そのデータベース上からの公開を第一段階として目指した。第二段階としては、そのデータベースを用いながらの儀礼史料画像分析の方向性を探ることとした。研究対象とした史料は、「奏者番手留」および「諸公事指図」である。</p> <p>「奏者番手留」は、江戸幕府の儀礼の次第、準備段階における諸事を、袖珍大の折本に記録したものである。奏者番相互に借写されるとともに、手留筆筭に整理・保管され、幕府儀礼に関与する奏者番相互の情報共有の機能を有していた。奏者番を経験した大名家史料に伝来することが多く、現在、確認されているものでは、手留筆筭とともに伝来する田原藩三宅家（手留二千帖以上）及び館林藩秋元家（千百五十帖）をはじめとして、水野家文書（首都大学東京図書情報センター（本館））、阿部家文書（学習院大学史料館）、高遠藩内藤家（国立国会図書館）等にもまとまって伝来する。本所は、武蔵金沢藩米倉家に伝来した手留六百八十五帖を所蔵している。</p> <p>「諸公事指図」は、1954 年購入の特殊蒐書「徳大寺家史料」中の折本三帖。奥書に拠ると、徳大寺公純が弘化四年（1847）権中納言在任中に「恒例」上・下を謄写し、権大納言昇任後の嘉永三年（1850）に参議左大弁甘露寺愛長の蔵書を借用し「臨時」を謄写したもの。文化十二年（1815）・天保九年（1838）の先例も記され、清華の家格で官職昇進に恵まれた人物が、上卿等の役者を務める機会を想定して情報を集積・編成した実用書と考え得る。「恒例」下には、「日月蝕御殿囊之図」もある。</p>
<p>(5) 研究経過と成果</p> <p>2004 年度</p> <p>1. 「奏者番手留」685 帖及び「諸公事指図」3 帖の撮影。全体のモノクロマイクロフィルムによる撮影と、絵図部分に限定した六×七カラーポジフィルムによる撮影。2. モノマイクロフィルムのデジタル化。3. 両史料の目録データ作成。「奏者番手留」については、図書部作成の所蔵史料目録データベース用データがあり、これをもとにして、点</p>

検しながら、法量、頁数、絵図タイトル一点ごとのデータを付加した（エクセル使用）。1及び2については、担当者による確認を行いながら、(株)高橋情報システム（2005年度より社名変更インフォマージュ）に依頼して撮影及びデジタル化を行った。3については、学術研究支援員の荒木裕行（当時。2006年度より本所所員）・中川和明の両名が行った。

2005年度

1. 前年度撮影の六×七カラーポジフィルムのデジタル化（1617カット分）を行い、モノマイクロフィルムデータに、この部分のデータを置き換えて組み込んだ。2. 図書部及びCERT（電子計算機緊急対応チーム）の協力を得て、前年度作成の詳細データを、本所所蔵史料目録データベースの当該部分と置き換え、そこに1で作成した画像（7157カット分）をリンクさせた。3. 本所所蔵史料目録データベース上からの両史料の画像公開が可能となったことをホームページ上で掲示するとともに『画像史料解析センター通信』32号（2006年1月）において、検索手順を説明した。なお、奏者番手留に関連する史料群を確認するため、田原市博物館所蔵の田原藩古文書中の奏者番関係史料を調査した。4. データベースより絵図一点ごとの検索を可能にするため、絵図部分のカラーデータとデータとのリンク付けを行った。

2006年度

絵図データベース上でのより効果的な分析の可能性を検討するとともに、関連史料として、東北大学狩野文庫の近世儀礼関係史料の調査を行った。

2007年度

絵図部分のカラーデータとExcelの表「米倉家本「奏者番手留」及び徳大寺家本「書公事指図」儀礼図対応版」のリンク付けをしたものを、DVD版として完成させ、下記の科研費による成果の報告書（『画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究』2008年3月）に添付した。

以上のプロジェクトは、科学研究費による研究グループ〔基盤研究（A）研究代表者加藤友康「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」〕と協力しつつ行った。

(6)残された課題と今後の展望

近世儀礼研究は、近年活発になりつつあるが、史料の共有がなかなか進んでいない。これは、奏者番手留に見られるように、非常に細かい標記や色分け等が重要な意味を持つ史料であることと、量が膨大であることが理由としてあげられる。影印版では、かなり判型を大きくする必要があり、また大部になってしまう。この点、デジタル画像による公開は、近年のデジタル技術の急速な発展と相まって効果的である。また、データベースと連携させることにより、多様な分析の可能性を追究することができる。今後は、今回作成公開したデータベースを用いた具体的な分析事例が蓄積されていくことを期待したい。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

論文・史料紹介など

- ① 小宮木代良・山口和夫「本所所蔵『奏者番手留』及び『諸公事指図』のデジタル化とデータベースとの連携」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』三二号、2006)
- ② 山口和夫「徳大寺公純謄写「諸公事指図」三帖について—東京大学史料編纂所蔵徳大寺家本史料の紹介—」(『画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究』科学研究費補助金基盤研究(A)研究代表者加藤友康「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」] 課題番号 16202014、2004年度～2007年度、の報告書、2008)
- ③ 小宮木代良「奏者番手留の成立と関連史料」(同上報告書)
- ④ 小宮木代良「近世画像関係画像史料(奏者番手留・諸公事指図)のデータベース化と分析」(同上報告書)

口頭発表

- ① 小宮木代良「近世儀礼プロジェクト—奏者番手留を中心として—」(画像史料解析センター開設10周年記念研究集会「画像史料研究の成果と課題」、2007年6月29日)

外部資金

- ① 科学研究費補助金基盤研究(A)研究代表者:加藤友康「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」] 課題番号 16202014、2004年度～2007年度

画像データ公開

- ① 史料編纂所データベース所蔵史料目録上から、『奏者番手留』及び『諸公事指図』の画像データ7157コマを閲覧することができる。
- ② DVD版として、Excelの表「米倉家本「奏者番手留」及び徳大寺家本「書公事指図」儀礼図対応版」に、カラー画像のリンク付けをしたものを作成し、『画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究』科学研究費補助金基盤研究(A)研究代表者加藤友康「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」] 課題番号 16202014、2004年度～2007年度、の報告書、2008)の附録として配布。

11 南島関係画像資料の研究プロジェクト

<p>(1) プロジェクト名称 南島関係画像資料の研究</p>
<p>(2) 実施年度 2005 年度～2009 年度</p>
<p>(3) 研究組織 代表：石上英一</p>
<p>(4) 研究目的・概要</p> <p>島津家文書には、『南島雑話』（南島研究のバイブルとも称される）、「琉球国絵図」など南島（琉球諸島、奄美諸島など）の画像史料が残されている。『南島雑話』に関しては、島津家本に名越左源太の日記や『大島要文集』・『大島私考』・『南聘紀行』など関連する史料も多く残されている。また、「名越左源太関係資料」南島雑話関係草稿を含む）が永井本『南島雑話』とともに名瀬市奄美博物館に収蔵され、鹿児島県立図書館には「大嶮便覧」の稿本や名越左源太が参加した大島の海防図の稿本である「大嶋古図」などが所蔵され、鹿児島大学図書館には五本の『南島雑話』が収蔵され、さらに名越左源太が海防図作成の際に作成した自筆の絵図下書きも残されていて、近年注目を集めている。さらに、『南島雑話』の画像には名護市博物館所蔵『琉球寫真景』と共通するものがあり、薩摩画壇や薩摩の博物学との関係の究明が必要とされている。</p> <p>そこで、『南島雑話』所収の画像（草木鳥獣魚、民俗など）を分析し、嘉永期の対外関係史料として貴重な『大嶋古図』などの関連史料も検討し、『南島雑話』の成り立ちと写本系統と収載画像の系統、記載内容を研究した。</p>
<p>(5) 研究経過と成果（2007 年度～2009 年度）</p> <p>【2006 年度まで】</p> <p>すでにカラー撮影済みの島津家文書本『南島雑話』（見開き 400 コマ）、鹿児島県立図書館所蔵「大嶮便覧」（見開き 30 コマ）・「大嶋古図」（2m×4m を分割撮影しデジタル接合）に加えて、奄美博物館所蔵「名越左源太関係資料」の現地調査と撮影、那覇市歴史博物館などで関連史料の調査をおこない、『南島雑話』に直接関連する画像史料の撮影をほぼ終えた。また「琉球国絵図」（島津家文書、奄美諸島・琉球本島・先島の 3 図）、「大嶋古図」のデジタル接合画像を作成し、研究環境を整えた。この間の研究成果は『画像史料解析センター通信』第 29～37 号に「南島雑話とその周辺」一～八として発表した。詳しくは『画像史料解析センターの成果と課題』（2007 年 6 月）を参照されたい。</p> <p>【2007～2009 年度】</p> <p>2006 年度までに蓄積した研究資源を利用して研究を進めるとともに、追加の史料調査・蒐集を行った。</p> <p>史料調査は 2007 年度には、2008 年 1 月～ 2 月に那覇市に出張し、沖縄県立図書館郷土資料室、那覇市歴史博物館で資料調査（画像関係史料・琉球家譜）を実施した。あわせて、浦添市美術館・沖縄県立博物館所蔵の那覇港図屏風の高精細写真版、沖縄県立図書</p>

館東恩納寛惇文庫所蔵の「首里古地図」の高精細写真版の購入の手続きを行った。また本年度に写真版を入手した「那覇図屏風」、「首里古地図」の史料編纂所図書室での利用方法について、図書部と協力して、沖縄県立図書館、浦添市美術館、京都大学総合博物館と覚書を締結した。

2008年度は、9月に那覇市に出張し、沖縄県立図書館、那覇市歴史博物館、さらに浦添市図書館で、史料調査を実施した。また2009年1月に鹿児島市に出張し(経費は東京大学大学院情報学環研究費)、『南島雑話』の島庁本を利用したと考えられる黎明館所蔵「奄美史談」(明治26年本の写本)の調査を行い、写真複製を購入した。あわせて鹿児島県立図書館郷土資料コーナーで「お由良騒動関係資料」を調査した。さらに2009年2月に那覇市歴史博物館(情報学環研究費)、石垣市(石垣市史編集室、八重山博物館等)で琉球馬事資料調査を行った。

2009年度は5月に武田科学振興財団杏雨書屋において『南島雑話』写本2種を調査し、島津家文書本との比較検討を行った。(その成果は『画像史料解析センター通信』47号の「南島雑話とその周辺」一七に報告した。)6月には沖縄に出張し、那覇市歴史博物館で琉球家譜の日琉・薩琉関係史料、画像関係史料の調査、浦添市立図書館沖縄学研究室で『南島雑話』関係史料の調査、沖縄県立図書館郷土資料室で琉球家譜・『南島雑話』関係史料の調査、琉球大学附属図書館で宮良殿内文庫・伊波文庫の画像関係史料・『南島雑話』関係史料の調査、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館で鎌倉芳太郎資料中の『南島雑話』関係史料の調査をそれぞれ行った。(琉球大学附属図書館では、沖縄資料グループ・富田千夏氏に教示を得た。八屯山の宮良殿内文庫文書の「馬絵」については、『画像史料解析センター通信』46の「南島雑話とその周辺」一六において紹介した。)2010年2月には、沖縄の那覇市立博物館に出張し(プロジェクト経費)、琉球家譜の調査、薩琉・日琉関係記事のコピーを行った。

研究成果の発表としては2007年7月6日にシドニー大学アジア言語文化学科日本研究室において、同年7月26日に南カリフォルニア大学歴史学科において、それぞれ「奄美諸島の近世画像史料」の報告を行った。

また『画像史料解析センター通信』37・39～48号に「南島雑話とその周辺」を発表し、48号にて課題を残しつつも完結した。48号には蒐集した写真版資料の一覧と、「南島雑話とその周辺」の総目次を掲載した。

なお情報学環の08年度後期～09年度前期の歴史情報論の授業で、「南島画像資料の研究」を講義した。

(6)残された課題と今後の展望

研究代表者の退職に伴い、本研究はセンター研究プロジェクトとしては休止することとなったが、休止時点で以下の①～④の課題が残っている。

① 蒐集資料の整理

『琉球家譜』の薩琉・日琉関係記事、奄美諸島関係記事の整理
複写により蒐集した奄美諸島史料の整理

② 『南島雑話』の校訂本の作成

③ 「名越左源太関係資料」中の南島雑話関係草稿類の研究、島津家文書・島津家本中の名越左源太関係資料の整理

④ 南島の馬事史料、馬事関係画像史料の整理と分析

また『南島雑話』関係資料について、奄美博物館、奄美大島の地域研究者と共同で分析を行い、「大島古図」や『南島雑話』の画像の現地調査を行う課題、及び「琉球国絵図のEzMaker 画像データに積文の埋込みを行う課題」は、手をつけることができなかった。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

- ・石上英一、論文「南島雑話とその周辺」九～一七、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第39～48号（除第38号）、2007年～2010年
- ・石上英一、口頭報告「奄美諸島の近世画像史料」、於シドニー大学アジア言語文化学科日本研究室、2007年7月6日
- ・石上英一、口頭報告「奄美諸島の近世画像史料」、於南カリフォルニア大学歴史学科、2007年7月26日

12 森川杜園『正倉院御物写』の研究プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 森川杜園『正倉院御物写』の研究</p>
<p>(2)実施年度 2008 年度</p>
<p>(3)研究組織 代表：稲田奈津子</p>
<p>(4)研究目的・概要</p> <p>8 世紀の第一級文物がそのままの姿で伝世された正倉院宝物の品々は、世界的にも貴重な存在である。これらの品々は幕末～明治初期の宝庫修理や文物調査の過程で再発見され、古代史研究を飛躍的に発展させるとともに、各種博覧会や博物館創設事業との関わりにおいて大きな役割を果たすことになった。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵の卷子本『正倉院御物写』は、従来全く注目されてこなかった資料であるが、この時期の調査に参加した彫刻家森川杜園による宝物模写を集成したものであり、当該期の正倉院宝物をめぐる諸相を知る上で格好の素材である。</p> <p>本研究ではこの『正倉院御物写』の分析を核に、森川杜園による模写・模造の作成過程を通して、幕末・明治期の正倉院宝物調査の実態や模写・模造事業について具体的に跡付け、政府や民間による各種博覧会・博物館創設事業との関わりについても考察することを目的とした。同時に、『正倉院御物写』から現存の宝物・文書では失われてしまった情報を読み取り分析することで、正倉院研究・古代史研究に新たな視点を提示することもめざした。</p>
<p>(5)研究経過と成果</p> <p>まず、森川杜園『正倉院御物写』全 8 巻の詳細な内容分析をおこなった。本資料には、約 100 点の宝物が模写されており、中には正倉院宝物以外からの模写も紛れ込んでいる。断片的な模写も多く、原品を同定する作業にはかなりの労力を要したが、宮内庁正倉院事務所の方々のご協力も得られ、ほぼ全点について同定することができた。</p> <p>ついで、本資料収載の模写をもとに作成されたと推測されるものを中心に、森川杜園による正倉院宝物の模造作品について、所蔵者のご協力のもと原物調査を実施した。具体的には白鶴美術館・春日大社・奈良国立博物館・東京国立博物館・東大寺図書館・橋本家等において調査をおこない、箱書や所蔵台帳等の関連資料もあわせて検討し、模写や模造が作成される過程やその背景などについて、多くの新知見を得ることができた。</p> <p>さらに本資料を通して窺われる、幕末・明治期における文化財調査や各種博覧会・博物館創設事業の実態、あるいは正倉院宝物の模写・模造作品を求める芸術家・文化人の存在などに注目し、関連諸文献をもとに考察をおこなった。</p> <p>研究成果は下記（7）のとおりであり、時々々の調査成果報告として②～④、⑥を、研究報告・論文として⑤、⑩を、最終的なまとめとして①を作成した。研究期間終了後も、補足調査の成果を⑧、⑨として発表するとともに、国外の学会や一般向けの講座におい</p>

て成果の概要を紹介する機会を得た（⑦、⑪～⑬）。①では、「解説」としてこれまでの研究成果を概括するとともに、本資料の全体像をカラー写真図版で掲載した。この図録を関係諸機関や図書館、関心を持つ研究者等に配布することで、今後、本資料が研究素材として広く一般に活用されるよう配慮した。

以下に、研究成果の一端を紹介したい。

森川杜園は、幕末に奈良人形師として名声をあげた人物であるが、明治以降は社寺の古器旧物調査に加わり、その模刻複製に従事するようになる。『正倉院御物写』に貼り込まれた模写・拓本の多くは、明治5～13年に断続的におこなわれた正倉院宝物調査において作成されたものと推測され、萌芽期の文化財調査や国内外の博覧会事業、博物館創設事業との関わりからも、注目される資料群となっている。

たとえば『正倉院御物写』に残された明治8年作成の模写群には、政府から派遣された博覧会事務局の手になる『正倉院御物図』のための下絵という側面と、奈良博覧会社という民間の依頼による模造制作のための下図という側面とが共存しており、当時の宝物調査の官民不可分なあり方や、そこで杜園の果たした役割の大きさなどを具体的に知ることができる。

また明治22年の墨絵弾弓の模写について、東京浅草の呉服染物商である橋本仙之助の依頼による模造制作のための下図であること、その模造が現在白鶴美術館に所蔵されていることなどを明らかにした。この事例から、杜園が宝物調査の成果を自身の創作活動の中に積極的に活かし、またそれを享受する文化人のひろがりを読み取ることができよう。

そのほかに、「日名子文書」と呼ばれる正倉院流出文書の模写が含まれていることに注目し、正倉院文書の庫外流出の実像について具体的に跡付けることを試みるなど、本資料から派生する様々な課題について取り組んだ。

本研究の遂行に際しては、プロジェクト経費の他に、財団法人福武学術文化振興財団研究助成金および科学研究費補助金（若手研究（B））と連動して調査・出版等をおこなった（詳細は下記（7）参照）。

(6)残された課題と今後の展望

当初予定していた資料調査は、それぞれの所蔵者等の格別のご配慮により、ほぼ全点について十分な時間をかけて実施することができた。また調査過程で先学より多くの貴重な助言を得ることができない、予想以上の研究成果をあげることができた。さらに本資料の所蔵者である東京大学大学院工学系研究科のご理解のもと、その全貌を図録として公表することができたことは、今後の研究発展の礎を築くという意味でも、大きな意義があったと考えている。奈良県立美術館における特別展「正倉院宝物と近代奈良の工芸—模造と創作 140年の歩み—」（会期：2013年6月15日～7月21日、図録有）では、『正倉院御物写』が大きく取り上げられるとともに、本研究の成果をふまえた解説がなされ、正倉院宝物に関心を持つ多くの人々に本資料が紹介されることとなった。

今回は『正倉院御物写』に特に注目して検討をおこなったが、正倉院宝物を描いた

図像は実はかなり多種多様なものが残されており、それらの総合的検討が必要とされているところである。今後も正倉院宝物図の事例研究を、地道に積み重ねていきたいと考えている。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

図録

- ①東京大学大学院工学系研究科建築学専攻・東京大学史料編纂所画像史料解析センター編集・発行『森川杜園『正倉院御物写』の世界』、全48頁、2009年3月

論文

- ②稲田奈津子「墨絵弾弓の模写・模造・文様—森川杜園『正倉院御物写』の世界—」『画像史料解析センター通信』42号、2008年7月
- ③稲田奈津子「宝物と模造をつなぐもの～墨絵弾弓再考—森川杜園『正倉院御物写』の世界(2)—」『画像史料解析センター通信』43号、2008年10月
- ④稲田奈津子「宝物と模造をつなぐもの～檜和琴と白石火舎—森川杜園『正倉院御物写』の世界(3)—」『画像史料解析センター通信』44号、2009年1月
- ⑤稲田奈津子「森川杜園『正倉院御物写』と日名子文書」『正倉院文書研究』11号、2009年2月
- ⑥稲田奈津子「杜園と模写をめぐる人々—森川杜園『正倉院御物写』の世界(4)—」『画像史料解析センター通信』45号、2009年4月
- ⑦稲田奈津子「正倉院文書調査の過去と現在」(原題: 정창원문서 조사의 과거와 현재) 韓国木簡学会『木簡と文字』5号、2010年6月
- ⑧稲田奈津子「史料散歩 麒麟の頭は誰の作か」『日本歴史』753号、2011年2月
- ⑨稲田奈津子「杜園と橋本仙之助—森川杜園『正倉院御物写』の世界(5)—」『画像史料解析センター通信』54号、2011年7月

口頭発表

- ⑩稲田奈津子「森川杜園『正倉院御物写』と日名子文書」第26回正倉院文書研究会、於大阪市立大学文化交流センター、2007年11月
- ⑪稲田奈津子「正倉院文書調査の過去と現在」韓国木簡学会第7回定期発表会、於韓国・ソウル市立大、2010年1月
- ⑫稲田奈津子「正倉院宝物と文化財調査」第7回日研フォーラム、於韓国・高麗大学校日本研究センター、2010年3月
- ⑬稲田奈津子「正倉院宝物と模写・調査—森川杜園『正倉院御物写』の世界—」金鶏会公開講座2014年秋季「正倉院文書連続講座・1」、於金鶏会館(長野県長野市)、2014年9月

新聞報道

「正倉院宝物模写100点 東大所蔵明治期、模造の下絵に」

読売新聞 2008年12月9日夕刊(大阪本社)3・4版

「正倉院宝庫の「日名子文書」 幕末の国学者 流出関与？」

読売新聞 2009年3月19日夕刊（大阪本社）3版

外部資金

財団法人福武学術文化振興財団研究助成金「幕末・明治期における正倉院宝物調査の研究—森川杜園の模写・模造を中心に—」、2008年度、代表者：稲田奈津子

科学研究費補助金（若手研究（B））20720164「東アジアにおける儀礼文化の比較歴史学的研究」、2008～2011年度、代表者：稲田奈津子

『森川杜園『正倉院御物写』の世界』表紙



13 戊辰戦争期摺物画像研究プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 戊辰戦争期摺物画像研究プロジェクト</p>
<p>(2)実施年度 2009年度～2016年度（継続中）</p>
<p>(3)研究組織 代表：箱石 大 メンバー：保谷 徹</p>
<p>(4)研究目的・概要</p> <p>【研究目的】 幕末維新时期における錦絵や摺物など多様な出版物画像研究の一環として、戊辰戦争期に相次いで発行された官版日誌や新聞などの新たなメディアを中心に、所在及び書誌情報を調査・収集して、摺物データベースへのデータの追加を目指すとともに、デジタル撮影等によって収集した版面画像の分析を目的とする。</p> <p>【概要】 本所及び他機関等が所蔵する戊辰戦争期の官版日誌・新聞・摺物及びその関連史料を調査して、所在情報及び書誌データを作成し、デジタル撮影等によって版面画像の収集を行ない、その内容を分析する。</p>
<p>(5)研究経過と成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2009年度より、戊辰戦争期木版刊行物研究会と連携して活動。 ・2010～2012年度、科学研究費助成事業（科学研究費補助金）：基盤研究(C)「『太政官日誌』を対象にした史科学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」（研究代表者：藤實久美子・ノートルダム清心女子大学准教授）と連携して活動。 ・2012年12月9日、公開研究会「『太政官日誌』に関する史科学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」を開催（於：東京大学史料編纂所大会議室）。 ・2013年3月、共同研究のメンバーらが執筆した論文を収録した箱石大（編）『戊辰戦争の史科学』（勉誠出版）を刊行。 ・2015年度より、科学研究費助成事業（科学研究費補助金）：基盤研究(B)「官版日誌類に関する史科学の構築および戊辰戦争期の情報と地域についての学際的研究」（研究代表者：藤實久美子・ノートルダム清心女子大学教授、研究期間：2018年度まで）と連携して活動。 ・2016年2月11日、公開研究会「官版日誌類に関する史科学の構築および戊辰戦争期の情報と地域についての学際的研究」を開催（於：立命館大学アート・リサーチセンター）。 ・これまでに本プロジェクトで撮影した官版日誌等のデジタル画像は、本所の「所蔵史料目録データベース」から閲覧できるようになっている。

(6)残された課題と今後の展望

本プロジェクトでは、戊辰戦争期の官版日誌類について、当初より書籍史・書誌学・メディア史などの研究者と連携して学際的な共同研究を進めてきているが、最近では進展著しい板木研究の成果を導入することにも取り組んでいる。近世後期～幕末維新期の板木や木活字などの調査・研究から得られた成果を参照し、木版印刷物が持っている史料情報をより多角的に読み取っていくことも、これからの課題である。なお、今後とも戊辰戦争期木版刊行物研究会や関連諸分野の研究者と連携し、科研費などの外部資金の獲得にも努めながら共同研究を進めていきたい。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

論文・史料紹介など

- ・石田七奈子「東京大学史料編纂所所蔵『太政官日誌』の特徴」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第57号、2012年4月）
- ・箱石 大「京都大学附属図書館所蔵トコトンヤレ節版木調査報告」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第58号、2012年7月）
- ・箱石 大「修正された『太政官日誌』掲載の戊辰戦争届書」（科学研究費補助金・基盤研究(C)「『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」研究成果報告書DVD、2013年11月）
- ・箱石 大「戊辰戦争期のはやり唄《トコトンヤレ節》」（東京大学史料編纂所編『日本史の森をゆく 史料が語るとおきの42話』中公新書、中央公論新社、2014年12月）
- ・戊辰戦争期摺物画像研究プロジェクト「官版日誌類に関する史料学の構築および戊辰戦争期の情報と地域に関する学際的研究」公開研究会開催報告」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第73号、2016年4月）

著書・編著

- ・箱石 大（編）『戊辰戦争の史料学』（勉誠出版、2013年3月）

研究報告

- ・藤實久美子「『太政官日誌』の共同調査について—方法論の模索—」（公開研究会「『太政官日誌』に関する史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」、東京大学史料編纂所大会議室、2012年12月9日）
- ・石田七奈子「摺り消し・校正に見る『太政官日誌』異本」（同上）
- ・山口順子「『太政官日誌』諸本比較について」（同上）
- ・金子貴昭「板木観察と出版研究」（公開研究会「官版日誌類に関する史料学の構築および戊辰戦争期の情報と地域についての学際的研究」、立命館大学アート・リサーチセンター、2016年2月11日）
- ・藤實久美子「江戸時代の造本の仕組み」（同上）

新聞報道

- ・「戊辰戦争 新政府側が情報戦」（『読売新聞』2017年3月29日朝刊・文化欄）

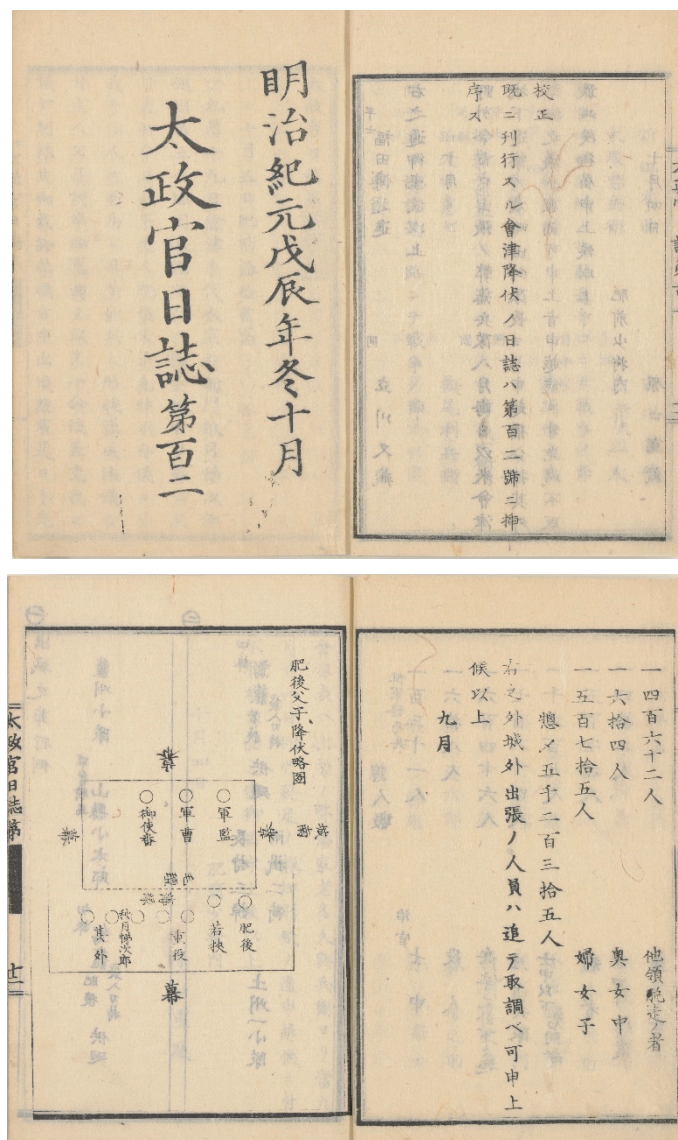
外部資金

- ・科学研究費助成事業（科学研究費補助金）：基盤研究(C)、課題番号：22520699、課題名：『太政官日誌』を対象にした史科学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」、研究期間：2010～2012年度、研究代表者：藤實久美子・ノートルダム清心女子大学准教授（本科研費より研究分担金を受入）
- ・科学研究費助成事業（科学研究費補助金）：基盤研究(B)、課題番号：15H03246、課題名：「官版日誌類に関する史科学の構築および戊辰戦争期の情報と地域についての学際的研究」、研究期間：2015～2018年度、研究代表者：藤實久美子・ノートルダム清心女子大学教授（本科研費より研究分担金を受入）

関連データベース

「摺物データベース」「錦絵データベース」

会津藩降伏を報じた『太政官日誌』明治元年・第102号（表紙と内容の一部）



14 赤門書庫旧蔵地図プロジェクト

(1)プロジェクト名称 赤門書庫旧蔵地図プロジェクト
(2)実施年度 2010 年度～2014 年度
(3)研究組織 代表：杉本史子 メンバー：近藤成一、杉森玲子、保谷徹 共同研究員：小野寺淳（共同研究員・茨城大学教授）、佐藤賢一（共同研究員、電気通信大学准教授）、鈴木純子（共同研究員・元国立国会図書館地図室）、橋本直子（共同研究員、葛飾区郷土と天文の博物館） 研究協力者：今井健三（日本水路協会技術アドバイザー）、横地留奈子・吉岡誠也
(4)研究目的・概要 本プロジェクトは、赤門書庫旧蔵の未整理史料の整理・目録化・公開にむけての作業を行い、あわせて当該史料群の研究を行うことを目的とした。
(5)研究経過と成果 当該史料調査・整理作業を完了し、「赤門書庫旧蔵地図」として、2015 年度から史料編纂所HP 史料所蔵目録データベースから目録公開を、図書閲覧室において一般閲覧を開始した。 なお本研究は、基盤研究（C）「近代化模索期の「国史」編纂と地図作成—赤門書庫旧蔵地図の研究」（代表・杉本史子 24520737）と共同して行った。 本研究により、明らかになった「赤門書庫旧蔵地図」の性格は以下の通りである。 ①新発見史料・稀少な史料群の存在 本地図群の大きな特色としては、なんと言っても、19 世紀中期の、航行するための海の地図＝海図を含んでいることが上げられる。これまで内容が明らかでなかった幕末の徳川幕府軍艦組作成による海図などが発見されたことや、国内他機関には残存数が少ない明治 10 年代の日本版海図が豊富に残されていることが明らかになったことは、特筆すべき成果といえる。幕末から明治 20 年代の海図が群として残されていることから、日本版海図作成の展開を具体的に追うことが可能となった。 ②近代初期の歴史・地理編纂の痕跡を残す史料群 明治政府の歴史・地理編纂機関に前述の海図群が残されたのは、三角測量による陸上の実測図が整備されていない段階にあって、海図の位置データや経緯度が陸図作成に利用されたことが大きいと考えられる。「赤門書庫旧蔵地図」には、その作業痕跡が残された地図が多く残されている。この、作業の痕跡をとどめた地図群であるという点が、「赤門書庫旧蔵地図」の第二の特色となっている。この点は陸図も同様で、調査のなかから、近世に作成された絵図が、近代地図作成に利用されてきた具体的痕跡を見出すことがで

きる。伊能図により海岸線を描き、天保国絵図によりその内部を充足させる作業が行われたのである。

③近世～近代移行期の人材データとしての価値

明治初期海図に書き込まれた測量・作図・描画の技術者や出版関係者の詳細な情報は、この時期特有のものであり、「近代化模索期」の実際の地図作成・出版を支えた人材・技術・組織解明の基礎データとなる。これらのデータは、一般の文字記録類には残りにくいものであり、貴重なものといえる。

『東京大学史料編纂所研究成果報告書 2014-3 近代化移行期の歴史地理把握のタイムカプセル・赤門書庫旧蔵地図の研究』（本文 392 頁）巻末には、吉岡誠也作成の史料目録、「海図に記載された測量者一覧」、「海図に記載された製図・印刷者一覧」を掲載した。内務省地理局職員データ（横山、2002～2003）、および史料編纂所所蔵近世後期～近代初期の印刷図人名データ（杉本、2009～2011）とあわせ、近世から近代の、出版・測量・地図作成・地理編纂をささえた技術者・実務者たちの基礎データとなりえるものである。

(6)残された課題と今後の展望

本 P J としては完了した。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

本研究成果の一部を反映した成果は下記の通り。

著書

杉本史子、磯永和貴、小野寺淳、ロナルド・トビ、中野等、平井松午編『絵図学入門』（東京大学出版会、2011.7、259P）

“Cartographic Japan: A History in Maps”, edited by Karen Wigen, Sugimoto Fumiko, and Cary Karacas, The University of Chicago Press, 3. 2016, 336 pages, 111 color plates, 1 table.

杉本史子編『東京大学史料編纂所研究成果報告 2014-3 近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究』（2014）およびそれに収録された諸成果。

論文

杉本史子「新たな海洋把握と「日本」の創出一開成所と幕末維新」（『日本史研究』634号、2015.6、pp.3-31）

杉本史子「地図・絵図の出版と政治文化の変容」（横田冬彦編『シリーズ＜本の文化史＞4 出版と流通』平凡社、二〇一六年）pp.203-248）

研究報告

杉本史子「幕末の官板日本図の出版と政治文化の変容」（日本史研究会9月例会「空間表現の知と政治-19世紀の海から」、京都、機関紙会館、2014.9.28）

Fumiko Sugimoto, “Modern Nautical Charts and Geo-Bodies” (paper presented at the Third Global History Seminar Workshop: Sources in Global History, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo, January 28, 2017).

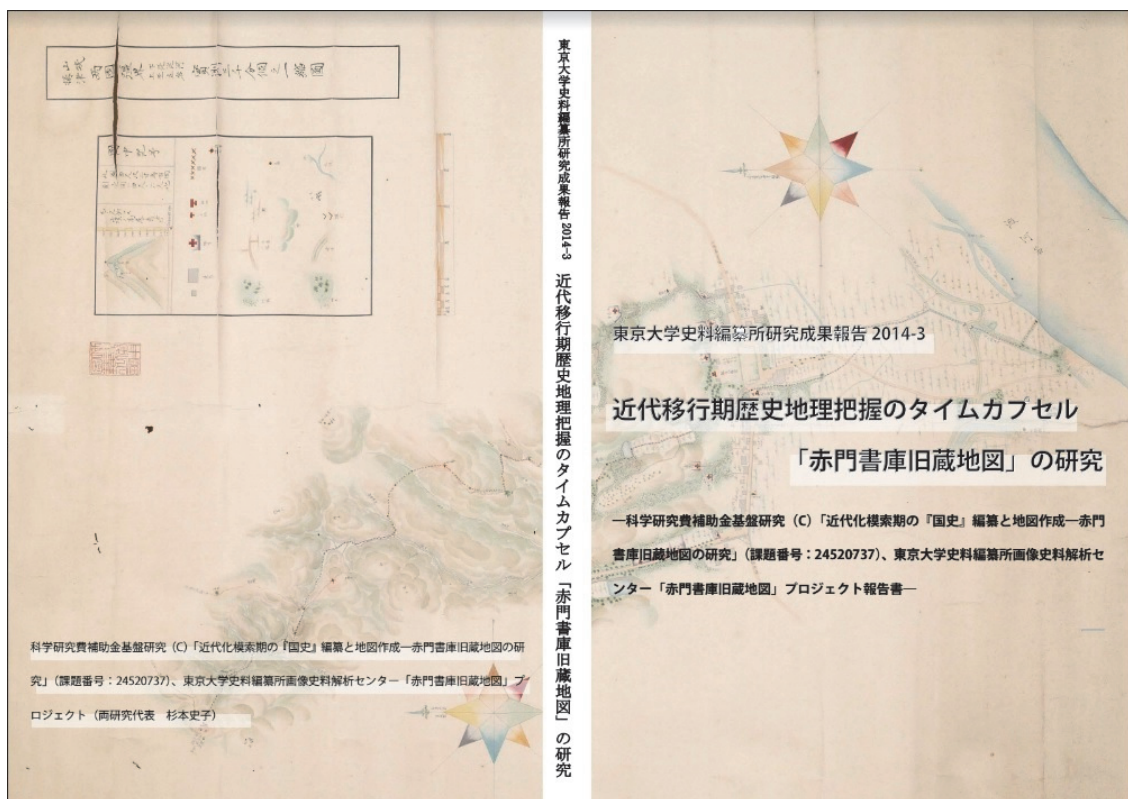
講演

杉本史子「官板実測日本地図—19世紀パリ万国博覧会に出品された『日本』」（伊能図講演会「伊能忠敬と沿海地図・官板実測日本地図」、徳島大学総合科学部常三島けやきホール、2016年3月5日）

杉本史子「近世出版文化の中の絵図・地図—海洋把握の変容と「日本」」（「東洋文庫 東洋学講座「江戸の書物」2016. 12. 6」※『東洋学報』第98巻第4号（2017年3月）に、要旨掲載

データ公開

「赤門書庫旧蔵地図」として、史料編纂所HP史料所蔵目録データベースから目録と一部画像の公開を開始し、図書閲覧室において、一般閲覧を開始した。



2014 報告書 表紙～裏表紙 （上記 7 参照）

15 江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究プロジェクト</p>
<p>(2)実施年度 2015年度～2016年度（継続中）</p>
<p>(3)研究組織 代表：杉本史子 所内メンバー：松方冬子 共同研究員：岩淵令治（学習院女子大学） 小宮山敏和（国立公文書館） 藤田英昭（徳川林政史研究所） 松尾美恵子（学習院女子大学名誉教授・徳川林政史研究所） 研究協力者：鈴木純子（元国会図書館）、高橋喜子・望田朋史・吉成香澄</p>
<p>(4)研究目的・概要 東京大学史料編纂所所蔵の江戸城図・江戸図・交通図および関連史料を調査・研究する。この過程で、文書群のなかでのその位置づけを視野に入れて、他館所蔵図・文字史料もあわせ検討する。</p>
<p>(5)研究経過と成果 史料編纂所、国立歴史民俗学博物館、徳川林政史研究所、国立国会図書館憲政資料室勝海舟関係文書調査、古河歴史博物館の調査を行った。この過程で、これまで単体で検討されることの多かった関係図を、藩政文書のなかで検討すること、および諸館に所蔵されている類似の諸図を横断的に検討することの有効性が浮かび上がってきた。 また、文化資源学会分科会「文化資源学を支えるテクノロジー（文テク）」・神田神社・本PJの三者が共催して講演会・江戸城巡見「天下祭再考ー昔と現在（いま）」を開催した（2015年11月29日 於・千代田区千代田図書館・皇居）。 このほか、現地調査として、旧江戸城現地調査 乾通～半蔵門旧江戸城現地見学を実施した（2015年12月6日）。 研究会としては下記を開催した。 2015年度 ○9月30日 鈴木純子氏「江戸図の系譜と近年の成果」 高橋喜子氏「書評：野中和夫『江戸城』第四章「紅葉山と歴代将軍」」 2016年度 ○5月27日 福武ホール中会議室 藤田英昭氏「幕末江戸城に関する諸問題ー仮御殿の時代」 杉本史子「近世の政治体制と江戸城ー〈公儀の裁き〉を問い直す前提として」 ○6月24日 福武ホール中会議室</p>

篠崎佑太氏「徳川斉昭「参与」の登城—嘉永期を中心に—」

徳川林政史研究所、国立国会図書館の調査について相談。

○11月8日 研究会・打ち合わせ会 福武ホール地下1階共同研究室2

なお、基盤研究(C)「近代国家建設の歴史的前提」(2017～2019年度 代表 杉本史子 17K03094)と共同して検討を行っていく予定である。

(6)残された課題と今後の展望

今後は調査成果としての画像・解題の公開やシンポジウムの開催を検討していく。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

講演会など

○文化資源学会分科会「文化資源学を支えるテクノロジー(文テク)」・神田神社・本PJ共催して講演会・江戸城巡見「天下祭再考—昔と現在(いま)」を実施した(2015年11月29日 於・千代田区千代田図書館・皇居)

松尾美恵子氏「将軍と天下祭」

岩淵令治氏「武家と天下祭」

岸川雅範氏「天下祭の巡行路～江戸時代後期の神田祭を中心に～」

○講演会「変動期を問う—江戸城と二条城」13:00～ 福武大会議室

講演者：齋藤慎一氏「中世江戸城の構造と変遷」

藤田達生氏「二条城と慶長期の国制」

コメンテータ：小宮山敏和氏

著書

杉本史子『近世政治空間論』(2017年刊行予定)

成果公開

調査成果の一部は、東京大学史料編纂所HP所蔵史料目録データベースから順次公開している。



江戸城桜田門(高麗門・柵形から)

第3分野（古文書画像）

16 花押彙纂の画像データベース構築プロジェクト

(1)プロジェクト名称 花押彙纂の画像データベース構築プロジェクト
(2)実施年度 1998年度～2016年度（継続中）
(3)研究組織 代表：林譲 メンバー：川本慎自・井上聡 研究協力者：木下聡・戸谷穂高
(4)研究目的・概要 本プロジェクトは、史料編纂所の編年研究部各室や書庫に分散して架蔵されている『花押彙纂』について、マイクロフィルムによる撮影を行った上で、デジタル画像・テキストデータの作成を行い、『花押彙纂』に関する総合的・網羅的・集中的なデータベースを構築する試みである。『花押彙纂』とは、各時代にわたる古文書等の花押部分のみを影写し、人名・史料群名・巻第・年月日・文書名等の文字情報を記したものの集成で、推定5万件を数える。『大日本史料』卒伝条等の編纂に利用されているが、大部の上、分散して架蔵されているため、利用しにくい面があった。そこで、総合的な画像データベースを構築し、多くの利用に供しようとするものである。 文書に据えられた花押は、その文書の発給者の特定や真偽の判定、年代推定の有力な根拠である。史料編纂所では、その重要性に鑑み、『花押かがみ』平安時代1冊、鎌倉時代3冊、南北朝時代4冊を編纂・刊行するとともに、その基礎作業として作成された平安・鎌倉時代4冊分の花押カード約3万枚を「花押カードデータベース」として公開しており、『花押彙纂』データベースは、これらと相互補完関係にあるものである。
(5)研究経過と成果 本データベース構築の意義は、先述したように、『花押彙纂』を総合的に利用可能とすることにあり、そのみに止まらず、「花押類似検索システム」にとって、最適な素材となり得る点である。同システムは、ユーザーが文書等から切り出した任意の花押画像を、WEBを通じて同システムの検索対象ボックスに投げ入れ、同システムに格納されている正規化された花押画像との比較を行い、類似する花押画像を提示する、というものである。特別推進研究(COE)「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」(2000～2004年度)により、「花押彙纂データベースと花押類似検索システムの構築」を進め、比較的ノイズが少ないという特徴を持つ「花押彙纂」を素材に、モノクロのパターン認識による類似検索システムを実装し、現在に至っている。ただし、比較検索の精度の問題や外部からの利用アクセスに関するセキュリティへの配慮に欠ける点があり、所内だけの限定的な利用に止まっている。

(6)残された課題と今後の展望

残された課題として、①花押彙纂データベースの改良、②『花押彙纂』の撮影・デジタル化以下の作業、③花押画像の切り出し・正規化作業の未着手部分の整理、④テキストデータの作成、⑤特殊史料部特殊史料第一室保管の花押マイクロフィルムのデジタル化、等があったが、いくつかを除き、ほぼ完了、または完了にむけて着手している。また、『花押かがみ』南北朝時代編4冊に準備した花押カード(約33,000件)の「花押カードデータベース」への搭載、及び「印章彙纂データベース」構築を踏まえた「花押彙纂データベース」との統合、並びに『花押かがみ』室町時代編以降の編纂のための作業が必要となっている。

こうした現状と問題を前提に、新たに採択となった科学研究費基盤研究(A)「前近代人物情報論の構築にむけた花押・筆跡の網羅的収集と汎用的利用に関する研究」(研究代表者林讓)では、(1)花押・筆跡情報の蓄積スキームの構築研究、(2)情報学的解析方法の援用による機能高度化研究、(3)歴史的人物情報の統合化と共有にむけた発信方法の研究、を課題として三つの研究グループを組織し、作業に着手している。

(1)の具体的な作業は、未だデジタル化されていない「花押カード」『花押彙纂』『印章彙纂』等を対象に処理を進め、既存の「花押カードデータベース」に登録して、その充実化・統合化を図るとともに、史料編纂所が擁する膨大な史料デジタルアーカイブから、花押画像の抽出・蓄積が可能になるような開発を企図し、これらの新たに生成される花押画像とその情報群とのシームレスで有機的な連携を目指すものである。

(2)については、従前の人文学的蓄積を前提に、しかし劇的な技術革新により、その有効性をいかに発揮している情報学の協力を得ることで、筆跡と花押の画像解析を推進するものであり、史料編纂所・奈良文化財研究所の連携・協力によって実現・公開に供している「MOJIZO」の機能を花押の形象判別に応用することで、同一人の花押の抽出や、類似花押の析出などへと拡張することを目指すものである。

(3)花押・筆跡画像データにメタデータとして付与する人物属性データに関して、30種を超える SHIPS-DB から人物に関係する多様な情報を抽出・蓄積し参照利用することが可能になっている人物情報レポジトリと連動させることにより、双方向的応答が可能となり、より高度なレベルのデータ解析・人物推定などの機能につなげることを目的にしている。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

口頭発表

林讓・井上聡「花押彙纂・崩し字プロジェクト」、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター開設一〇周年記念研究集会、東京大学、2007年6月

林讓「花押・筆跡データの網羅的収集と汎用的利用をめざして」、第115回人文学とコンピュータ研究会発表会企画セッション「歴史的文字に関する情報と経験知の共有」、東京大学、2017年8月

外部資金

科学研究費、基盤研究 (A)、08401011、「花押画像のデータベース構築とその計測処理に関する基礎的研究」、1996～99 年度、林讓

科学研究費、基盤研究 (A)、17H00921、「前近代人物情報論の構築にむけた花押・筆跡の網羅的収集と汎用的利用に関する研究」、2017～2019 年度 (予定)、林讓

データベース

花押データベース

花押彙纂データベース (所内公開)

The screenshot shows a web interface for the 'Hanashi Hojimon Database'. At the top, there are navigation links: '花押彙纂データベース', 'DB説明', '項目検索', '結果検索', and 'ヘルプ'. Below these are buttons for '前件', '次件', '先頭', '最終', '一覧', and '比較検索'. The main content area displays search results for '121件' (121 items). The first result is for '足利尊氏' (Ashikaga Takauji). The details listed are: 【人名】 足利尊氏, 【人名注記】 (blank), 【史料群名】 上杉古文書, 【巻】 -, 【所蔵地】 (blank), 【和暦年月日】 元徳4年2月29日(13320020290), 【文書名】 安堵状, 【位置書】 (花押), 【影写本架番号】 (blank), and 【備考】 木戸宝寿殿. To the right of the text is a large image of a document fragment. The image shows handwritten Japanese text: '429' at the top right, '上杉古文書' written vertically, '元徳四年二月廿九日' (Genroku 4, 2nd month, 29th day), '安堵状' (Atodajō), and '木戸宝寿殿' (Kido Hōshū-den). At the bottom of the image is a ruler and a label with the number '0601052'.

花押彙纂データベース「足利尊氏」検索結果表示画面

17 金石文拓本史料の整理と公開プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 金石文拓本史料の整理と公開プロジェクト</p>
<p>(2)実施年度 1998年度～2016年度（継続中）</p>
<p>(3)研究組織 代表：菊地 大樹 メンバー：稲田奈津子・井上聡・金子拓・川本慎自・藤原重雄 共同研究員：伊藤宏之（台東区教育委員会） 研究協力者：太田まり子・大塚紀弘・村山卓・相場峻</p>
<p>(4)研究目的・概要 東京大学史料編纂所所蔵金石文拓本史料を調査・研究の上デジタル化し、データベース構築を通じて整理・公開を進める。あわせて金石文史料論の研究を進める。</p>
<p>(5)研究経過と成果 貴重書として架蔵されている約 1900 点の拓本を再調査するとともに、未整理の拓本約 400 点についても研究を進め、編年目録を作成した。さらにデジタル化を進め、DB を構築して書誌・画像・地理情報を付加して順次登録・公開を進めている。あわせてフィールドワークを実施するなど、金石文拓本史料の調査・研究を進めている。</p>
<p>(6)残された課題と今後の展望 今後もデジタル化を進め、架蔵金石文拓本全点の DB への登録を実現する。また、DB システムそのものの抜本的な再構築も検討する。 関連して、調査対象を広げてフィールドワークを継続し、研究を進める。平安遺文 DB に未収録の題跋編・金石文編をはじめとして、鎌倉遺文の金石文史料の取り扱いに関する研究、自治体史からの金石文情報の網羅的収集により、14 世紀前半ぐらいまでを視野に入れた研究を進める。データベースについても、将来的には架蔵拓本以外にも視野を広げ、総合的な金石文史料データベースへの発展を企図している。</p>
<p>(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧 論文・史料紹介など 高橋慎一郎「鎌倉時代の鐘銘と『鎌倉遺文』」『鎌倉遺文研究』19、2007 年 菊地大樹「山川均『石造物が語る中世職能集団』」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』40、2008 年 菊地大樹「主尊の変容と板碑の身体」、藤沢典彦編『石造物の研究』高志書院、2011 年 菊地大樹「中世における五輪塔造立の展開」、大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書『大分の中世石造遺物』5、総括編、同センター、2017 年 口頭発表 Hiroki Kikuchi, Facts of the Lotus Sutra and Scriptural Practices in Early Medieval Japan, New Directions in Buddhist Studies Lecture Series: Buddhist Studies at</p>

University of Tokyo, at Stanford Center for Buddhist Studies, Stanford University, 2008年2月

菊地大樹「中世金石文史料論序説」東アジア仏教研究会、駒澤大学、2008年5月

菊地大樹「悉曇・偈頌から見た中世金石文の教理的背景」、「日本宗教研究における新史料」ワークショップ、プリンストン大学、2014年3月

菊地大樹「中世における五輪塔造立の展開—大分県の事例を中心に—」、「全貌が見えた！大分の石造物」中世石造物シンポジウム、大分県立図書館、2015年12月

外部資金

- ・科学研究費補助金「日本金石文の編年史料化と史料学的分析方法に関する研究」（基盤研究C・2005～2007・17520421）
- ・科学研究費補助金「拓本調査を軸とする日本金石文の情報資源化と歴史叙述への応用的研究」（基盤研究B・2011～2014・23320134）

構築データベース

金石文拓本史料データベース

18 所内デジタル素材に関する実験プロジェクト

(1)プロジェクト名称 所内デジタル素材に関する実験プロジェクト
(2)年度 2004～2008 年度
(3)研究組織 代表：宮崎勝美（2008 年度は久留島典子） 所内メンバー：林譲、藤原重雄、井上聡、谷昭佳、高島晶彦、中村尚暁
(4)研究目的・概要 センター研究プロジェクトの課題の変遷を振り返ると、肖像画模本、荘園絵図模本、古写真、錦絵、摺物といった本所所蔵史料をアーカイブとして公開するというスタイルから出発し、現在では、高度な解析を目指すブラウザの開発など先端的な研究に移行しつつある。その方向性を要約するならば、単に画像として公開する段階から、大型史料や痛みの激しい史料などを対象として、原本史料の扱いにくさをデジタル諸技術で克服し、かつ研究情報をデータとして付与するという方向で高度化している。こうした研究の進行は大いに歓迎すべきことであるが、一方で、所内の諸活動により派生したデジタルデータもしくはその素材を、どのように共有化して利便性を高めるかという根本的な問題は依然残されている。本プロジェクトでは、画像生成の標準化とその保管方法、共同利用化を踏まえたディレクトリのあり方などについて、各種の実験を行い、一定程度のフォーマットを作成することを目指し、得られた成果を技術・図書、電算担当、情報処理委員会などに提示することで、所内における関連業務の円滑化に寄与することを目的とした。
(5)研究経過と成果 【2006 年度まで】 図書部・技術部と連携しつつ、本所所蔵レクチグラフのデジタル化の標準的な作業モデルおよび仕様を作成し、「宗像家断絶由来絵巻」を選んでテストを行ったうえで、18 冊分のデジタル化を行った。また本所所蔵レクチグラフの約 600 冊全冊のデジタル化の準備として、冊・页数・状態に関する一覧を作成した。またデジタル画像の所内サーバーの格納先について検討したが、史料編纂所情報処理主幹・前近代日本史情報国際センターとの協議を含め 2007 年度以降に繰り越し課題とした。 【2007～2008 年度】 2007 年度には、図書部・技術部との連携のもとに、2006 年度までに実験・試行したレクチグラフのデジタル化を本格的に開始し、約 150 冊のデジタル化処理（冊子解体→デジタル撮影→再製本）を行った。またレクチグラフデジタル化の成果を踏まえて、史料編纂所書庫耐震工事（2008 年度）に伴う本所所蔵貴重書類退避のためのデジタルバックアップ撮影に協力した。 2008 年度は図書部・技術部との連携を重視してプロジェクト代表を宮崎から図書部長

兼技術部長の久留島へ交代した。レクチグラフ全冊のデジタル化を完遂し、前近代日本史情報国際センターの協力により所内公開を行った。また耐震工事に伴う退避のために4000番台写本のデジタル撮影を行い、WEB閲覧を可能にした。

(6)残された課題と今後の展望

すでに作成したデジタルデータの整理を実施し、2008年度以降推進される新しい採訪デジタル撮影システム（ボーンデジタルシステム）への対応を予定したが、十分には展開できなかった。主要メンバーの退職もあり、レクチグラフのデジタル化という所期の目的の達成をもって本プロジェクトは一旦休止することとした。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

デジタル化した画像は、所蔵史料目録DB、Hi-CAT Plusで公開し、図書閲覧室での利用が可能となっている。

19 電子くずし字字典データベース開発プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 電子くずし字字典データベース開発プロジェクト</p>
<p>(2)実施年度 2001年度～2016年度（継続中）</p>
<p>(3)研究組織 代表：久留島典子 メンバー：小宮木代良・松沢克行・稲田奈津子・遠藤珠紀・井上聡 研究協力者：宮崎肇（特任研究員）</p>
<p>(4)研究目的・概要 史料編纂所歴史情報処理システムより公開する「電子くずし字字典データベース」の機能拡充・強化を推進するとともに、同様の目的を有する学外研究組織との連携を実践する。</p>
<p>(5)研究経過と成果 本プロジェクトは、2000年度に採択された科学研究費「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」（研究代表 石上英一、2000～2004年度）の一研究としてスタートし、2001年度より附属画像史料解析センタープロジェクトとして認定され、今日に至っている。「電子くずし字字典データベース」の構築は、2001年度に始まり、2004年度に所内公開を通じて改良・調整を行ったのち、2006年度から所外公開に移行した。史料編纂所が所蔵する原本史料を中心として、平安時代から江戸時代初期にわたる字形データの収載に継続的に取り組み、現在総データ数 25 万件余、字種 6 千余、語彙種 2 千 5 百余に達している。日本史関連の史料を読み解くうえで必要な字形・字種を、ほぼ網羅していると言っている。公開以来、多くのユーザーによる利用があり、直近では月間 3 万 5 千件以上になるなど、SHIPS-DB 群のなかにおいて中核的な立場を占めるに至っている。 こうしたデータベース構築に加えて、研究機関間の連携についても積極的にとりくんできた。とくに木簡に記された字形を収集し、コンセプトが近いデータベースを公開している奈良文化財研究所との協力関係は、非常に強固なものになっている。具体的には、同研究所の「木簡画像データベース・木簡字典」と「電子くずし字字典データベース」を同一のインターフェイスから一度に検索することのできる連携システムの開発・公開である。2008 年度より調整を始め、翌 2009 年度に開発を本格化。両所で覚書を取り交わした後、公開する運びとなった。この連携によって、奈良時代から江戸時代に及ぶ字形の変遷を、手軽に検索できるようになったことは、意義ある成果といえるだろう。当該システムにあっても幅広い利用があり、直近では月間 2 万 5 千件前後の検索が行われている。 また 2011 年度からは、正倉院事務所のご協力を得て、「電子くずし字字典」に正倉院文書より字形画像を収載することが可能となった。結果、連携システムを通じて、木簡と正倉院文書という奈良時代を代表する史料群間で、字形データを比較することができ</p>

るようになった。古代史とりわけ奈良時代史研究を行ううえで、当該連携システムが欠くべからざるツールとして認識されるようになったことは望外の成果である。

さらに奈良文化財研究所との連携を通じて、同所と関わりの深い情報学研究者との交流も生まれるに至った。結果、両所が所有する字形データを素材に、OCR 技術等を援用した機械解読の可能性を開くべく共同研究を推進し、2016 年度に「木簡・くずし字解読システム (MOJIZO)」を開発、一般に供与することが叶った。任意の文字画像をシステムに投げ込むと、近似する候補字形が複数表示されるという単純な構造ながら、誰もが気軽に歴史的文字の読解に取り組むことを可能にするとして、多くのマスコミが報じるどころとなった。本システムの通称 MOJIZO については、奈良文化財研究所と共同で、商標登録を完了したことも付記しておきたい。今後、さらなる正答率の確保をめざして、ソフトウェアの改善を重ねゆくことが課題となっている。

(6)残された課題と今後の展望

今後の課題と展望としては、電子くずし字字典データベースへの収載コンテンツをさらに数的に拡充するとともに、現在蓄積の薄い近世以降の字形データを充実することを特記しておく。開発推進の主体が、古代史・中世史を専門とする所員であったため、社会的に最も需要の大きい近世字形の集積が遅れたことは、大いに反省しなければならない。また奈良文化財研究所のみならず、字形データの収集にとりくむ研究機関・グループとの連携深化も大きな課題である。画像データを対象とする汎用的なプロトコルの確立が進みつつある現在、コンテンツ共有や利活用に関する新たな枠組みを視野に入れながら、多様な連携の在り方を模索してゆくことが必須だろう。情報学と連動した字形解読に関しては、これまで推進してきた OCR 技術に加えて、自然言語処理技術やディープラーニングなどのアプローチも導入することで、より一層正答率を向上させることが期待されている。同様の観点から字形解析に加えて、花押の判別にも援用できるよう取り組みを強めてゆきたい。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

研究報告

- ①林譲・井上聡「花押彙纂プロジェクト・崩し字プロジェクト」(東京大学史料編纂所画像史料解析センター開設 10 周年記念研究会、2007 年 6 月 於東京大学福武ホール)
- ②井上聡「東京大学史料編纂所と奈良文化財研究所での文字画像データベースの連携について」(シンポジウム 「字体と漢字情報」—HNG 公開 10 周年記念— 2015 年 11 月 21 日 於国語学研究所)
- ③井上聡「歴史史料から字形を集める」(JADH2016 プレシンポジウム「日本語文字情報の管理とその応用」2016 年 9 月 12 日 於東京大学福武ホール)

参考文献

- ①井上聡、馬場基「文字字形総合データベース作成の試み」、大学共同利用機関法人人間文化研究機構・研究資源化事業委員会『人間文化研究情報資源強化研究会報告集』1、2010 年 3 月

- ②井上聡『『電子くずし字字典データベース』の課題と将来構想』情報処理学会研究報告<人文科学とコンピュータ研究会報告>2013-CH-97, No. 10, 2013年1月
- ③白井啓一郎・末代誠仁・井上聡・久留島典子・馬場基・渡辺晃宏・中川正樹「古文書字形検索のための画像処理」情報処理学会研究報告<人文科学とコンピュータ研究会報告>2013-CH-97, No. 7, 2013年1月
- ④井上聡「デジタル画像を用いた歴史史料管理体系の再構築～東京大学史料編纂所の取り組み～」、『日本写真学会誌』77-1, 2014年2月
- ⑤末代誠仁・白井啓一郎・馬場基・渡辺晃宏・井上聡・久留島典子・中川正樹「古文書デジタルアーカイブに対する横断的字形検索サービスの試作」じんもんこん 2014 論文集, 2014年12月
- ⑥井上聡「東京大学史料編纂所「電子くずし字字典データベース」の概要と展望」、『情報の科学と技術』65-4, 2015年4月
- ⑦末代誠仁・馬場基・渡辺晃宏・井上聡・久留島典子・中川正樹「古文書字形デジタルアーカイブのための検索システムの試作」じんもんこん 2015 論文集, 2015年12月
- ⑧井上聡「文字画像データベースの連携について」『漢字字体史研究2 字体と漢字情報』勉誠出版、2016年11月
- ⑨末代誠仁・井上幸・高田祐一・方国花・馬場基・渡辺晃宏・井上聡「木簡およびくずし字のデジタルアーカイブを文字画像で検索するサービスの実装」じんもんこん 2016 論文集, 2016年12月

外部資金

- ①科学研究費補助金・特別推進研究「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」(研究代表 石上英一、2000～2004年度)
- ②角川文化振興財団助成金 2006・2007年度
- ③科学研究費補助金・基盤研究 A「日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究」(研究代表 石上英一、2005～2008年度)
- ④科学研究費補助金・基盤研究 S「史料デジタル収集の体系化に基づく歴史オントロジー構築の研究」(研究代表 林讓、2008～2011年度)
- ⑤科学研究費補助金・基盤研究 A「ネットワーク環境における前近代日本史史料の翻刻・編纂フレームワークの確立」(研究代表 加藤友康、2009～2012年度)
- ⑥科学研究費補助金・基盤研究 A「ボーンデジタル画像管理システムの確立に基づく歴史史料情報の高度化と構造転換の研究」(研究代表 山家浩樹、2011～2014年度)
- ⑦科学研究費補助金・基盤研究 S「木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集」(研究代表 渡邊晃弘、2013～2017年度)
- ⑧科学研究費補助金・基盤研究 A「歴史的文字に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人文・情報学融合研究」(研究代表 馬場基、2014～2017年度)
- ⑨科学研究費補助金・基盤研究 A「原史料メタ情報の生成・管理体系の確立および歴史知識情報との融合による研究高度化」(研究代表 山家浩樹、2015～2019年度)

⑩科学研究費補助金・基盤研究 A「前近代人物情報論の構築にむけた花押・筆跡の網羅的収集と汎用的利用に関する研究」(研究代表 林譲、2017～2019 年度)

構築データベースおよびデータベースの連携検索システム

* 電子くずし字字典データベース (現在総データ数 25 万余、字種約 6 千、語彙種約 2 千 5 百)

* 『電子くずし字字典データベース』『木簡画像データベース・木簡字典』連携検索

開発した文字解読システム

* 木簡・くずし字解読システム (MOJIZO)

史料編纂所・奈良文化財研究所が所有する字形データを素材に、OCR 技術等を援用した機械解読の可能性を開くべく共同研究を推進し、2016 年度に開発したものである。

20 中国第一歴史档案馆所蔵日本関係档案画像デジタル化プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 中国第一歴史档案馆所蔵日本関係档案画像デジタル化プロジェクト</p>
<p>(2)実施年度 2006 年度～2010 年度</p>
<p>(3)研究組織 代表：保谷 徹 メンバー：松沢裕作 共同研究員：黄 栄光（中国科学院自然科学史研究所、現中国科学院大学） 研究協力者：東アジアWG</p>
<p>(4)研究目的・概要 中国第一歴史档案馆（北京市）との研究協力協定にもとづき、同館が所蔵する明清時代の皇帝文書 1000 万件のうちから、日本関係档案 1.2 万件を抽出、デジタル撮影による画像提供と目録出版のための共同研究の実施、国際研究集会開催による成果の公開などを研究目的とした。東アジアに所在する日本関係史料の調査・収集事業検討会（東アジアWG）と連携して実施した。</p>
<p>(5)研究経過と成果 科学研究費補助金基盤研究（A）「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」（研究代表者：保谷、2003～6 年度）、同基盤研究（A）「東アジアの国際環境と中国・ロシア所在日本関係史料の総合的研究」（研究代表者：保谷、2007～10 年度）を得て、計 3 回の国際研究集会を実施し、約 3000 点の清代档案をデジタル画像で収集、『中国第一歴史档案馆所蔵中日関係史料整理目録—清代朱批奏摺・録副奏摺の部』（2010 年）を出版するなどの成果をあげた。</p>
<p>(6)残された課題と今後の展望 当初予定された 1.2 万件のうち、実際に調査・収集された数量は 4 分の 1 ほどであった。今後もさまざまな機会を得てプロジェクトの再開をはかり、日本関係档案に関する継続的な調査・収集を続けていくことが必要である。</p>
<p>(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧 発表論文・出版 王道瑞「中国第一歴史档案馆所蔵档案について」『東京大学史料編纂所研究紀要』17 号（2007 年） 王道瑞「故宫博物院文献館（第一歴史档案馆の前身）時代の清代档案編纂事業について」『東京大学史料編纂所研究紀要』18 号（2008 年） 鄒愛蓮「文化遺産の応急的保護と清史編纂プロジェクト」『東京大学史料編纂所研究紀要』20 号（2010 年） 中国第一歴史档案馆・東京大学史料編纂所編『中国第一歴史档案馆所蔵中日関係史料整理目録—清代朱批奏摺・録副奏摺の部』（2010 年）</p>

国際研究集会

「日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」（2006年7月25日、大会議室）

「日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」（2007年5月29日、大会議室）

「日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」（2009年5月13日、大会議室）

外部経費

科学研究費補助金基盤研究（A）「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」（研究代表者：保谷、2003～6年度）

科学研究費補助金基盤研究（A）「東アジアの国際環境と中国・ロシア所在日本関係史料の総合的研究」（研究代表者：保谷、2007～10年度）

画像データ公開

本プロジェクトで収集した档案史料約 3000 点の史料画像は、その後別途研究費を得てサーバへ搭載し、Hi-CAT Plus による公開利用に供している。

21 近世日蘭関係画像史料研究

(1)プロジェクト名称 近世日蘭関係画像史料研究プロジェクト
(2)実施年度 2008年度～2016年度（継続中） ①長崎オランダ商館文書中の商品情報画像の集成（2008～2013 以後修正を継続） ②本所所蔵日蘭関係画像史料の研究（2012～継続）
(3)研究組織 代表：松井洋子 メンバー：②松方冬子・高島晶彦 共同研究員：イサベル・田中・ファンダーレン（元日蘭学会）（2013～） 研究協力者：①田中葉子・矢田純子・阿曾歩 （ほかに、専門的立場からの助言者として、石田千尋（鶴見大学教授））
(4)研究目的・概要 ①「長崎オランダ商館文書中の商品情報画像の集成」は、オランダ国立中央文書館所蔵日本商館文書及びオランダ東インド会社文書、そしてインドネシア国立文書館所蔵文書（いずれも本所所蔵マイクロフィルム及び写真帳を利用）中にある長崎オランダ商館の注文商品リストを対象に、注文商品情報画像を、その名称、仕様、数量、注文者等の記述とともに集成し、近世日蘭貿易による輸入商品に関する研究の基礎情報を蓄積することを目的とする。合わせて、オランダ商館における注文帳の作成、貿易帳簿構造の中での位置づけを検討したい。 ②「日蘭関係画像史料の研究」は、近世の日蘭関係に関わる画像史料についての情報の蓄積と分析を目的とする。
(5)研究経過と成果 ①「長崎オランダ商館文書中の商品情報画像の集成」 日本からの注文に関する史料の全体像を簿冊ごとに概観するリストを作成し、分類した。そのうち、見本のためのスケッチや裂地の添付などを多く含む、日本人の個人名による注文に焦点を絞り、画像を含む情報を蓄積することとした。簿冊としてまとまって残っている1786年、1814年、1818年、1822年、1825年について、具体的な注作品の説明文言（オランダ語・日本語）、スキャニングした説明図の画像を集約した。また、1800年以降の年度毎の簿冊集成のうち、1817年から1823年の注文帳を抽出し、同様の作業を行なった。さらに同時期の文書のうち、インドネシア国立文書館所蔵文書に含まれる注文についても検討を行なった。 これまでに抽出・入力したデータについて共同研究員の協力を得て、原本校訂と修正を行ない、注文帳としてまとまっている前述の年代の簿冊及びインドネシア国立文書館所蔵史料よりの抽出については修正を終えたデータを取りまとめた。 基盤研究（B）「東インド会社解散と出島商館の変容—史料構造からみる近世日蘭関係

史料の研究」(2013年～2016年)と連携しつつ、貿易構造の中での注文の位置づけについても検討した。現存する作例の中には、見本図と酷似するものが見られ、注文を反映した商品の調達が意図されたことがわかるが、商館長日記等には、注文の数量が確保できず苦慮する状況も見られ、注文の実現度については帳簿による検証が不可欠である。

②「日蘭関係画像史料の研究」

まず、今後の日蘭関係画像史料研究の展開方向を探るため、本所所蔵原本および模写等に含まれる日蘭関係、さらに広く対外関係に関わる画像史料について検索し、リストを作成した。それをふまえ、2013年度大展示においては『和蘭甲比丹ブロムホフ家族図』(伝 川原慶賀)の展示を行なった。その際、同図について史料保存技術室による点検が行なわれ、修補の必要が指摘された。またパネル展示に用いた総合図書館所蔵『阿蘭陀加比丹并妻子等之図』(伝 川原慶賀)についても状態が懸念されることが判明した。

2014年度に行なった専門家を交えた検討会により、より傷みの激しいことが確認された総合図書館所蔵図について、外部資金による修補の申請(出光文化福祉財団)に協力し、2016年度～17年度に出光財団の助成により修補が実現することとなった。

両画はいずれも「川原慶賀」の印等はなく、同じ「束賀」の印を持ち、慶賀と同じ工房の画家によるものと推測され、他の類画と共に今後の研究が必要である。

両画に描かれているオランダ商館長ブロムホフ(1817～1823 在任)及びその同伴した妻子に関する画像とその背景について検討し、講演を行なった。

(6)残された課題と今後の展望

①については、他にも史料は多く残っており、長期的な取り組みが望ましいが、オランダ語の知識のある研究協力者を見つけることが難しく、当面これまでに行なった作業の修正のみを続けている。18世紀19世紀の転換期前後での貿易構造の変化と見本画を伴う発注のあり方の関連については、さらに事例を集め考察することが必要と考えている。

②については、さらに史料編纂所所蔵日蘭関係画像史料についての、個別検討を進めていきたい。当面、出島出入りの町絵師として知られる川原慶賀画とされ、本所に写しが一点寄託されている「出島図」の類図について、記載されたオランダ語を含めた再検討を行なうことを予定している。また、本所所蔵「和蘭甲比丹ブロムホフ家族図」についても、状態が悪化しないよう近いうちに経費を申請し修理につなげたい。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

田中葉子「長崎オランダ商館への発注―一八一四年用注文書の紹介―」(『画像史料解析センター通信』54号 2011.7)


石田千尋「インド更紗とヨーロッパ更紗 - 長崎オランダ商館へ渡された「一八一四年用注文書」をめぐって―」(『画像史料解析センター通信』56号 2012.2)

松井洋子「出島と異国人女性 ―妻子同伴の禁止をめぐって―」(東京大学史料編纂所編『日本史の森をゆく』中公新書 2014.12)

松井洋子「出島の暮らしと描かれたオランダ人」(講演 2017.3.18 板橋区立美術館)

注文品見本画像データのサンプル

【データNo.】	28
【EA番号】	11775
【RF番号】	1409
【Film (9998) group】	1
【Film vol.】	53
【Book】	2
【開始日付】	18139999
【終了日付】	18139999
【Form】	eyash
【発債地】	Nagasaki
【発債人】	het collegie
【発債地】	Batavia
【開始頁】	22
【終了頁】	73
【総頁数】	46
【冊子目録 vol.】	I
【冊子目録 page】	213
【写真帳 (7598-74)】	1(b)
【簿明名】	De Eijsochen van Zijn Keizerlijk Majesteit voor 't aanstaande A. 1814. ' T Collegie
【eye 記載頁】	59
【商品発先(voor)】	den WelEdele Heer Fisanats Kifi) Sama opperburgermeester (久松藩兵衛)
【eye 記述】	1 ps. krans beste soort met zilver beslag zo als afftekening
【画像有無】	有
【画像添付頁】	60
【添付位置】	額当 eijsoch 下に別紙貼付
【画像データ】	eyal-35
【品名】	引提
【種類】	(紙画上部) afftekening van krans
【個々の記述】	(下) No. 1 konffilour koe No. 2 peper kan No. 3 kraffen No. 4 keikjes
【備考】	-

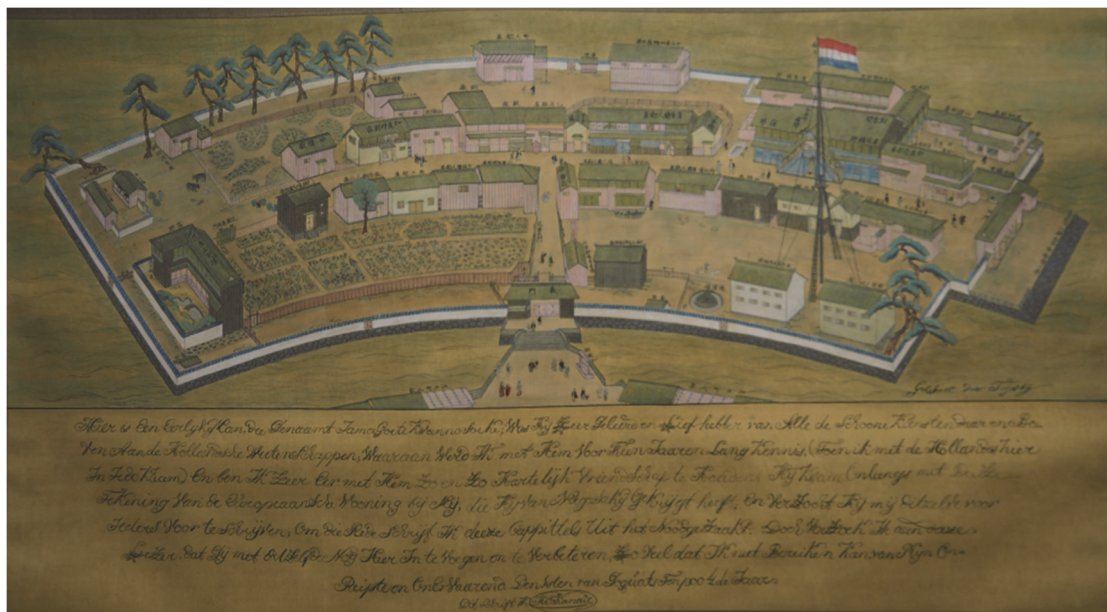


注文品見本画像データのサンプル



伝 川原慶賀 和蘭甲比丹ブロムホフ家族図
東京大学史料編纂所所蔵

川原慶賀『出島図』（模写） 個人蔵（東京大学史料編纂所 村岡ゆかり模写）



22 本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究プロジェクト</p>
<p>(2)実施年度 2010年度～2016年度（継続中）</p>
<p>(3)研究組織 代表：久留島典子 メンバー：林譲・保谷徹・箱石大・藤原重雄・谷昭佳・高山さやか・井上聡 研究協力者：高橋則英（日本大学芸術学部教授）・竹内涼子（学術支援職員）</p>
<p>(4)研究目的・概要 史料編纂所が明治20年代より史料蒐集事業のなかで蓄積してきた、膨大な台紙付写真ならびにガラス乾板を対象にすえ、専門的見地からその保全措置を行うとともに、生成履歴を含めた多様なメタ情報を付与することで、学術資源として高度な利用が可能となる環境を確立することを目指す。</p>
<p>(5)研究経過と成果 本所には明治20年代末より蓄積された莫大な写真資料が存在しており、その保全と運用に関する課題は、2006年度から実施された新館耐震工事より顕在化したところである。こうした経緯から本プロジェクトは、図書耐震対策チームの有志を母体として、やはり画像史料解析センターに属する古写真研究プロジェクトメンバーの参加を仰いで、結成されたものである。また2011～13年度まで画像史料解析センター客員教授であった高橋則英氏（日本大学芸術学部教授）に専門的観点からの指導を依頼し、その関係は今日も継続している。</p> <p>現在までのところ、ガラス乾板の調査および保全作業については、総数約13,000枚のうち約2300枚の処置を終えている。台紙付写真については、約12,000件のうち約半数のデジタル化を終えた段階にある。乾板は、1969年の東大紛争の影響で、収蔵の秩序も崩壊しているため、保全とあわせて体系的な復元も必須となっており、さまざまな関係史料と突合して検証を加える作業も並行して進めている。こうした作業に充当した経費は、画像史料解析センター運営経費のほか、科学研究費補助金・基盤研究（A）「ボーンデジタル画像管理システムの確立に基づく歴史史料情報の高度化と構造転換の研究」（2011～2014年度、研究代表者 山家浩樹）・同「原史料メタ情報の生成・管理体系の確立および歴史知識情報との融合による研究高度化」（2015～2018年度、研究代表者 山家浩樹）の支援を受けている。なお乾板保全の実作業は、科研経費をもって竹内涼子氏を学術支援職員として採用し、同氏の専門技術に拠っている。</p> <p>写真資料の保全と活用という本プロジェクトのミッション遂行にあたっては、史料編纂所独力では限界があり、写真学会をはじめ幅広い連携と協力を仰ぐことが不可欠であった。そこで上記科研と連携しつつ、所外に呼びかけて研究集会を実施してきた。まず2013年1月に、従前より協力関係にあったメンバーを軸として小規模な研究会をもち、</p>

論点や課題を析出し、これを踏まえて翌2014年11月6日に画像史料解析センター研究集会として「ガラス乾板の調査・保存・研究資源化に関する研究」を開催した（於東京大学情報学環福武ホール）。それまでの本プロジェクトの取り組みを報告するとともに、欧米において写真保存を主導するデボラ・ヘス・ノリス氏（デラウエア大学教授）をはじめ、写真史料を所蔵する機関の関係者を招いてパネルディスカッションを実施した。学内外から180名を超える参加者があり、写真史料保全に対する関心の高さが窺われるものとなった。本研究会の成果については、書籍化の要望もあって、2017年3月に久留島・山家・高橋の共編にて『文化財としてのガラス乾板』（勉誠出版）として刊行したところである。また、2015年3月には、研究会「ガラス乾板の後加工技術について一膜面返しを中心に」を開催し、コロタイプ印刷の刷版作製時に行われていた、ガラス乾板の画像膜を反転させる後加工技術の検証を行った。

さらに2017年7月には、画像史料解析センター研究集会「写真史料の保存と学術資源化をめぐる」を催し、『文化財としてのガラス乾板』にまとめた成果を検証するとともに、今後学術資源としてどのように生かしてゆくのかという視点から討論を行った（於東京大学山上会館）。同会の開催にあたっては、写真保存を世界的にリードするベルトラン・ラベドリン氏（パリ自然史博物館・教授、フランス国立保存研究センター・所長）を招き、基調講演をいただいたことは特筆すべき成果となろう。当該研究会も学内外から150名を超える応募があり、引き続き強い関心が寄せられていることを確認したところである。こうした幅広い交流を活かすことで、本プロジェクトをより進化させていくことを目指してゆきたい。

(6)残された課題と今後の展望

何よりもガラス乾板の保全を積極的に進めてゆく必要が大きい。劣化の状況に関する知識、対処方法などについては基盤を確立しえたが、実際の作業には熟練した技術が必要となるため、その進捗は遅々とならざるを得ない。どのように体制を整えて、継続的に作業を維持してゆくかが最大の課題である。また台紙付写真やその他の関連史料と、ガラス乾板を突合し、その収蔵秩序を復元する試みは、まだ緒についたばかりで、本格的な展開はこれからである。写真専門家と史学史に通じた研究者の協業を、学内外に広げることで、本プロジェクトのミッションをより速やかに、かつ確実に推進してゆきたい。

(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧

研究集会

- ①画像史料解析センター研究集会「ガラス乾板の調査・保存・研究資源化に関する研究」, 2014年11月, 於東京大学情報学環福武ホール
- ②研究会「ガラス乾板の後加工技術について一膜面返しを中心に」, 2015年3月, 於東京大学史料編纂所
- ③画像史料解析センター研究集会「写真史料の保存と学術資源化をめぐる」, 2017年7月, 於東京大学山上会館

書籍

- ①東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター研究集会『ガラス乾板の調査・保存・研究資源化に関する研究』予稿集, 2014年11月
- ②東京大学史料編纂所研究成果報告 2014-8『組織によるデジタル撮影画像の生成・管理 附 ガラス乾板の保存と情報化』, 2015年3月
- ③久留島典子・高橋則英・山家浩樹編『文化財としてのガラス乾板』勉誠出版, 2017年3月

DVD

「ガラス乾板の「膜面返し」技術の実際」, 2016年3月, 画像史料解析センター

参考文献

- ①高山さやか・竹内涼子「報告史料編纂所所蔵ガラス乾板を中心とする写真史料の調査・整理保存に関する研究会について」画像史料解析センター通信 61, 2013年4月
- ②谷昭佳・高山さやか・竹内涼子「プロジェクト活動報告 史料編纂所所蔵ガラス乾板を中心とする写真史料の調査・整理保存」画像史料解析センター通信 63, 2013年10月
- ③藤原重雄・貫井裕恵「台紙付写真に写された史料の行方—朝吹英二氏所蔵の場合—」画像史料解析センター通信 68, 2015年1月
- ④井上聡ほか「研究集会『ガラス乾板の調査・保存・研究資源化に関する研究』報告—成果と課題—」画像史料解析センター通信 68, 2015年1月
- ⑤谷昭佳「研究会報告「ガラス乾板の後加工技術について—膜面返しを中心に」の概要」画像史料解析センター通信 70, 2015年7月
- ⑥谷昭佳「歴史史料写真の研究資源化—ガラス乾板を中心にして—」, 韓国国史編纂委員会編『東アジア歴史史料の共有のための協力方案の模索 学術会議叢書1』所収, 2015年11月
- ⑦高山さやか「ガラス乾板の整理と保全と情報化から見えてくるもの」『日本写真学会誌』79-1, 2016年3月
- ⑧谷昭佳「歴史学と写真—史料編纂所写真室の開設」画像史料解析センター通信 75, 2016年10月

外部資金

- ①科学研究費補助金・基盤研究 (A) 「ポーンデジタル画像管理システムの確立に基づく歴史史料情報の高度化と構造転換の研究」(2011~2014年度、研究代表者 山家浩樹)
- ②科学研究費補助金・基盤研究 (A) 「原史料メタ情報の生成・管理体系の確立および歴史知識情報との融合による研究高度化」(2015~2018年度、研究代表者 山家浩樹)

23 デジタル画像分析に基づいた古文書料紙の研究プロジェクト

(1)プロジェクト名称 デジタル画像分析に基づいた古文書料紙の研究 —本書所蔵「中川文書」を素材に—
(2)実施年度 2011年度～2015年度
(3)研究組織 代表：村井祐樹 メンバー：西田友広・高島晶彦・山口悟史
(4)研究目的・概要 本所所蔵「中川文書」は南北朝期～戦国期の出雲国人赤名氏の文書で、大内氏・尼子氏・毛利氏の発給文書を多く含み、中国地方の紙質サンプルとしては恰好の素材である。そこで本研究においては、「中川文書」と出雲地域所在中世文書の比較・検討を中心に、時代・地域・文書群その他さまざまな観点から収集した料紙の高精細画像データによる古文書料紙の分析研究を行った。
(5)研究経過と成果 本所所蔵『中川文書』（旧書名「中川四郎氏所蔵文書」）五巻の解体修理、紙質調査・デジタル撮影を完了し、Hi-CATのみならず、史料情報統合管理システムにも掲載する準備ができています。また、調査・撮影を行った関連史料は「三澤文書」「赤穴神社文書」「新出中川文書」「鳥取市立博物館所蔵文書」「同県立博物館所蔵文書」「和鋼博物館所蔵文書」「巖倉寺文書」「城安寺文書」「古畑氏所蔵文書」「安国寺文書」「大賀文書」「西楽寺文書」「別火文書」「浄土寺文書」「赤塚文書」「木佐文書」「鰐淵寺文書」「塩冶神社文書」「熊野大社文書」「内神社文書」「豊龍寺文書」「清安寺文書」「藤本氏所蔵文書」「正木氏所蔵文書」「北川文書」「北村文書」「上田氏所蔵文書」「尼子文書」「曹源寺文書」「逢坂八幡神社文書」「農村文化協会所蔵文書」「中興寺文書」「尾多賀文書」等である。
(6)残された課題と今後の展望 本所所蔵史料中の戦国期中国地方文書の整理・集成が課題となる。
(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧 東京大学史料編纂所研究成果報告書 2011-1『小寺家文書』 東京大学史料編纂所研究成果報告書 2012-2『三澤家文書』 東京大学史料編纂所研究成果報告書 2014-2『天野家文書』

24 古文書画像を用いた編纂システムの研究プロジェクト

(1)プロジェクト名称 古文書画像を用いた編纂システムの研究
(2)年度 2012 年度
(3)研究組織 代表：木村直樹
(4)研究目的・概要 史料編纂所において、今後の人的体制を考えると、編纂の効率化は大きな課題となっている。そこで、本プロジェクトでは、古文書画像から各種データベースなどを利用して、個々の教員が編纂の工程を統合的に管理するシステムの確立を目指した。その際、すでに各種所内プロジェクト・科研などで開発が進められてきた、翻刻エディタや人名系 DB をブラッシュアップして、統合的に利用する方法を検討した。
(5)研究経過と成果 本プロジェクトは、デジタル化された古文書画像そのものに、翻刻支援システムや各種データベースを利用しながら統合的にデジタル編纂するための工程実験を2年間かけて行うことを目的とした。2012 年度は第一段階として、『大日本近世史料 細川家史料』第 24 巻（2013 年度出版）の一部について、既開発の翻刻支援システムを利用し、古文書画像にメタデータとして組み込む予定だった対象史料のテキスト入力を終了した。しかし、代表者が次年度他機関へ転出することとなったため、活動を中止することとなった。
(6)残された課題と今後の展望 代表者の他機関への転出に伴い、活動を休止した。
(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧 ・『大日本近世史料 細川家史料』第 24 巻

25 未整理画像史料データの統合化研究プロジェクト

<p>(1)プロジェクト名称 未整理画像史料データの統合化研究</p>
<p>(2)実施年度 2016年度（継続中）</p>
<p>(3)研究組織 代表：山口英男 メンバー：高橋敏子</p>
<p>(4)研究目的・概要 画像史料解析センターには、これまでの活動を通じて、史料調査の際の様々な撮影（分割・拡大・透過光・顕微鏡・高精細撮影等）データや、史料修理の過程で撮影した細分化したデータ、また絵図のような大容量のデータが蓄積されている。しかし、それらの有効な利用が図られているとはいえない状況にある。これらの研究資源化に向けた方策が必要である。本研究課題では、センターに蓄積されているこの種のデータの全貌を明らかにするための整理を行うことを目的とする。中でも、先駆的に検討の行われている正倉院関係の台紙付き写真・ガラス乾板のデータ活用を、関係プロジェクトと連携して実施することで、未整理データ統合化による研究資源化に向けたプロトタイプの形成を図る。</p>
<p>(5)研究経過と成果 ①本所所蔵の台紙付き写真・ガラス乾板のデジタル化画像のうち正倉院宝物（東大寺開田図・正倉院文書等）に関するデータ内容の整理・検討、②古代荘園図関係史料のデータ公開に関する調査・情報収集、③古代史関係画像史料の調査とアーカイブ化に関する実情調査・情報収集を行った。</p>
<p>(6)残された課題と今後の展望 当面は、編纂所に蓄積されている多様なデータに迫るための試掘的作業として、正倉院宝物及び古代荘園図関係の画像資源の集約と利用環境整備のための検討をもう1年程度継続する。未整理データ統合化による研究資源化に向けたプロトタイプの形成に向けた展開については、規模を改めて別途計画を策定することを企図している。</p>
<p>(7)関連する研究報告・参考文献・研究集会・展覧会・外部資金など一覧 山口英男「史料のデジタルアーカイブと歴史情報処理」（『人工知能』31-6、2016/11）</p>

II データベース紹介

画像史料解析センターの研究事業と関連して構築され、史料編纂所歴史情報処理システム SHIPS から公開（一部所内公開）されているデータベースに次のものがある。

1 花押カードデータベース

本 DB は、『花押かがみ』平安時代 1 冊、鎌倉時代 3 冊を編纂・刊行するための基礎作業として作成された花押カード 28,249 枚の画像とテキスト情報を収載したものである。『花押かがみ』は、精選された花押の集成であり、約 4,500 題の花押が掲載されているが、編纂のために準備・作成されながら収録されなかった花押カードは、およそ 24,000 枚に及ぶ。これらは古文書正文に関する情報や各人物の伝記史料として第一級の価値を持ち、なお利用すべき余地を残している。以上の考えから、これらを網羅的に公開したものである。

【作成主体／関連 PJ】花押彙纂の画像データベース構築プロジェクト

2 花押彙纂データベース（所内公開）

『花押彙纂（かおういさん）』は、史料編纂所が編纂用に作成した各時代にわたる花押集成史料集で、花押の影写（えいしゃ）、人名・史料群名・巻第・年月日・文書名等の情報を載せており、史料編纂所の各研究室や書庫に分散して架蔵されている。本データベースは、この『花押彙纂』の画像データベースであり、分散した情報を統合したものである。未だ WEB 公開に至っていないが、準備が整い次第、公開の予定である。

鎌倉時代以前の花押データについてはすでに「花押カードデータベース」が構築・公開されているため、この「花押彙纂データベース」は、南北朝期以後の時期を扱った『大日本史料』第 6 編以降の各編のデータを対象としている。件数は以下の通り。第 6 編 5,172 件、第 7 編 2,664 件、第 8 編 1,402 件、第 9 編 2,771 件、第 10 編 5,090 件、第 11 編 12,115 件、第 12 編 3,000 件、書庫 8,441 件。

【作成主体／関連 PJ】花押彙纂の画像データベース構築プロジェクト

3 歴史絵引データベース

肖像画の理解に必要な服飾史を中心とする学習・知識提供型のデータベースの構築を目指して設計された。その後、費用やシステム維持の面から機能をスリム化する必要が生じ、特に循環型の検索機能を削減して、トレース図に名所（などころ）・解説を付した図解と、刊行された図典類の図版を語彙から検索する索引との二本立てとし、横断的に参照するものとなっている。服飾史以外の分野について、データの増補の準備を進めている。

【作成主体／関連 PJ】中近世肖像画研究 PJ／歴史絵引データベース・肖像画模本データベース構築 PJ

4 史料編纂所所蔵肖像画模本データベース

主に戦前期に作成した肖像画の模本約 900 点について、比較的大きな画像とともに、書誌、像主、賛の翻刻、描写の記述、関連論文等の研究情報を付加したものである。

【作成主体／関連 PJ】中近世肖像画研究 PJ／中近世肖像画賛の史料情報化 PJ／歴史絵引データベース・肖像画模本データベース構築 PJ

5 肖像情報データベース

上記の所蔵肖像画模本 DB を補完するデータベースで、模本として所蔵しない絵画・彫刻・写真に関する情報を収集し、自治体史・図録等に掲載あるいは言及された人物肖像について、一々の典拠から作品一点ごとのカードを作成し、データベース化したものである。

【作成主体／関連 PJ】中近世肖像画研究 PJ／中近世公家肖像画の撮影デジタル化・解析 PJ／近世肖像画調査・収集・解析 PJ／中近世肖像画賛の史料情報化 PJ／歴史絵引データベース・肖像画模本データベース構築 PJ

6 史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベース

史料編纂所の所蔵する荘園絵図模本を地域、時代、彩色の有無などから検索するシステムで、2002 年に構築したもの。荘園絵図模本の高精細デジタルデータを基礎として、トレース図・釈文・参考文献など関連情報とリンクさせるとともに、画像の構図や図様を読み解いた画面情報も作成した。これは図様の文章化によって、絵図の内容検索を可能とする試みである。その後、このデータベースには、3D 地図ソフトによる荘園現地空間の復元図や空中写真の情報を付加し、更新を重ねている。27 件の絵図を登録。

【作成主体／関連 PJ】荘園絵図 PJ

7 金石文拓本史料データベース

史料編纂所所蔵金石文拓本史料をデジタル化して画像情報を提供するとともに、書誌・研究・地理情報を付加して検索結果を表示する。銘文・所在地などからの検索や、紀年銘により編年化も可能である。本金石文史料群の解題については、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第 7 号（1999 年）を参照。レコード数 2,054 件。今後も増加の予定。将来的には架蔵拓本以外にも視野を広げ、総合的な金石文史料データベースへの発展を企図している。

【作成主体／関連 PJ】金石文拓本史料の整理と公開 PJ

8 摺物データベース

下記の各機関が所蔵する摺物の書誌情報データベースで、タイトル・書誌情報・内容分類などでの検索ができる。内容分類は「火事」「暦」「信仰・行楽・名所図絵」などである。摺物（すりもの）とは、近世後期から近代初頭にかけて発行された、1 枚ないし数枚からなる出版物のことで、画像情報を豊富に含み、事件を伝える民衆的なメディアでもある。多色

摺りの鑑賞用である錦絵・浮世絵とは区別する。

所蔵機関：名古屋市立蓬左文庫／国立国会図書館／早稲田大学図書館／三井文庫／東北大学図書館（狩野文庫）／東京大学法学部（明治新聞雑誌文庫）／東京大学社会情報研究所／刈谷市立図書館（佐藤コレクション）／都立中央図書館（加賀文庫・東京志料）／横浜開港資料館／内藤記念くすり資料館／長崎県立図書館／名古屋市立鶴舞図書館／静岡県立中央図書館／東京大学総合図書館

【作成主体／関連 PJ】 錦絵・摺物 PJ（1996～2004 年度）/戊辰戦争期摺物画像研究 PJ

9 錦絵データベース

錦絵画像の発信は各所蔵機関から、また錦絵画像から読みとることのできる書誌情報は共有に、という考えにより、各機関対等平等の原則にもとづき作成されたデータベース。現在は、東京大学史料編纂所と 静岡県立中央図書館と 横浜開港資料館が所蔵しているほとんど全ての錦絵の書誌情報（静岡県立中央図書館 2,918 点、史料編纂所 762 点、横浜開港資料館 939 点）が検索できる。また、前 2 館の大半のものは画像を見ることができる。今後、この趣旨に賛同される錦絵所蔵機関の参加を期待している（書誌データの統一を図るため、当分の間、書誌データ登録時の確認は史料編纂所で実施）。

【作成主体／関連 PJ】 錦絵・摺物 PJ（1996～2004 年度）/戊辰戦争期摺物画像研究 PJ

10 古写真データベース

幕末から明治時代にかけて撮影された日本あるいは日本人に関係する古写真をおさめたデータベース。中でも歴史的人物を比定するための肖像写真の収集にはとくに力を入れており、そのため、厳密には写真技法といえない明治・大正期の雑誌『太陽』に収録された肖像画像も含んでいる。古写真のデータには、古写真 1 点ごとの書誌データとサムネイル画像、同じく通常サイズ画像、裏面の通常サイズ画像（裏面が撮影可能で情報がある場合）が含まれている。ただし、所蔵者との取極めにしたがって、書誌データのみをインターネット公開し、画像データについては本研究所内に限って公開を許可されたものもあり、その場合には史料編纂所図書閲覧室で画像閲覧が可能となっている。

現在までに格納した古写真データは、次のように分類される。

- (1) 本研究所が所蔵するもの：維新史料引継本に含まれる古写真類（複製含む）や購入・寄贈史料など
- (2) 本研究所に寄託されたもの：中野健明氏関係史料など
- (3) 本研究所で画像データとして調査・収集したもの：柴田剛中旧蔵史料など
- (4) 主として明治・大正期の雑誌『太陽』（博文館）に収録されている肖像画像など

古写真画像の調査・収集は、本研究所附属画像史料解析センターのプロジェクト事業として継続的におこなっており、今後も順次収録データを増やしていく予定である。

【作成主体／関連 PJ】 古写真研究 PJ

11 電子くずし字字典データベース

『草露貫珠』および本所所蔵史料原本の画像から切り出した文字情報をデータベース化したもの。1文字ごとの字形検索だけでなく、熟語などの文字列からの字形検索が可能となっている。また文字情報（文字・読み・部首）、詳細情報（時代・属性等）からの検索もできる。現在のデータ量は次の通り。総データ数 25 万余、字種約 6,000、語彙種約 2,500。

【作成主体／関連 PJ】 電子くずし字字典データベース開発 PJ

Ⅲ 資料集 2007年度～現在

i 研究組織

センター長

2007～2008年度	林讓
2009年度	保谷徹
2010～2012年度	久留島典子
2013～2014年度	林讓
2015～2017年度	山口英男

所属教員

2007年度	石上英一（教授）／保谷徹（教授・近世史料部）／末柄豊（准教授）／高橋敏子（准教授）／山口和夫（准教授）
2008年度	石上英一（教授）／林讓（教授）／保谷徹（教授）／松井洋子（教授・特殊史料部）
2009年度	石上英一（教授）／林讓（教授）／保谷徹（教授）／松井洋子（教授・特殊史料部）
2010年度	久留島典子（教授・古文書古記録部）／林讓（教授）／保谷徹（教授・近世史料部）／松井洋子（教授・特殊史料部）／箱石大（准教授・近世史料部）
2011年度	久留島典子（教授）／林讓（教授）／保谷徹（教授・近世史料部）／松井洋子（教授・特殊史料部）／箱石大（准教授）
2012年度	久留島典子（教授）／林讓（教授）／保谷徹（教授・近世史料部）／松井洋子（教授・特殊史料部）／箱石大（准教授）／木村直樹（助教）
2013年度	林讓（教授）／保谷徹（教授・近世史料部）／金子拓（准教授）／高橋敏子（准教授）／箱石大（准教授）／松澤克行（准教授）
2014年度	林讓（教授）／保谷徹（教授・近世史料部）／金子拓（准教授）／高橋敏子（准教授）／箱石大（准教授）／松澤克行（准教授）
2015年度	高橋敏子（教授）／保谷徹（教授）／山口英男（教授・古代史料部）／及川亘（准教授）／金子拓（准教授）／箱石大（准教授・近世史料部）／堀川康史（助教）
2016年度	高橋敏子（教授）／保谷徹（教授）／山口英男（教授）／及川亘（准教授）／金子拓（准教授）／箱石大（准教授・近世史料部）
2017年度	高橋敏子（教授）／保谷徹（教授）／山口英男（教授）／及川亘（准教授）／黒鳴敏（准教授）／藤原重雄（准教授・古代史料部）

客員教員

2007 年度	青山宏夫（国立歴史民俗博物館）
2008～2010 年度	高橋一樹（国立歴史民俗博物館）
2011～2013 年度	高橋則英（日本大学芸術学部）
2014～2015 年度	原田正俊（関西大学文学部）
2016～2017 年度（継続中）	田良島哲（東京国立博物館）

センター運営委員会

「iv 画像史料解析センター運営委員会委員一覧」参照

共同研究員

「I 研究プロジェクト報告」参照

非常勤職員

2007～2017 年度（継続中）	安達千鶴子
2007～2017 年度（継続中）	太田まり子

ii 研究成果

構築データベース

「II データベース紹介」参照

出版物

『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター開設 10 周年記念報告書 画像史料解析センターの成果と課題』（東京大学史料編纂所、2007 年）

東京大学史料編纂所編纂『日本荘園絵図聚影』积文編 1・古代（東京大学出版会、2007 年）

画像史料解析センター編『森川杜園『正倉院御物写』の世界』（2009 年、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻共編）

東京大学史料編纂所編『中国第一歴史档案館所蔵中日関係史料整理目録—清代朱批奏摺・録副奏摺の部』（2010 年、中国第一歴史档案館と共編）

村井祐樹編『小寺家文書』（東京大学史料編纂所研究成果報告書 2011-1、2012 年）

村井祐樹編『三澤家文書』（東京大学史料編纂所研究成果報告書 2012-2、2013 年）

東京大学史料編纂所編『描かれた倭寇—「倭寇凶巻」と「抗倭凶巻」—』（吉川弘文館、2014 年）

村井祐樹編『天野家文書』（東京大学史料編纂所研究成果報告書 2014-2、2015 年）

- 杉本史子編『近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究』
 (東京大学史料編纂所研究成果報告 2014-3、2015年)
- 井上聡・菊地大樹・太田直之・佐藤亜聖・七海雅人編『勝倉元吉郎拓本資料目録』(東京
 大学史料編纂所研究成果報告 2014-5、2015年)
- 井上聡・菊地大樹・太田直之・佐藤亜聖・七海雅人編『元興寺文化財研究所所蔵坂田二三
 夫拓本資料目録』(東京大学史料編纂所研究成果報告 2014-6、2015年)
- 山家浩樹編『組織によるデジタル撮影画像の生成・管理 附：ガラス乾板の保存と情報
 化』(東京大学史料編纂所研究成果報告 2014-8、2015年)
- 東京大学史料編纂所編纂『日本荘園絵図聚影』積文編 2・中世 1 (東京大学出版会、2016
 年)
- 須田牧子編『「倭寇図巻」「抗倭図巻」をよむ』(勉誠出版、2016年)
- アルフレッド・モーザー著、ペーター・パンツァー監修、宮田奈奈訳『明治初期日本の原
 風景と謎の少年写真家—ミヒャエル・モーザーの「古写真アルバム」と世界旅行—』
 (洋泉社、2016年)
- 江川文庫編『日本近代化へのまなざし—蕪山代官江川家コレクション—』(吉川弘文館、
 2016年、古写真研究PJ 編集協力)
- 『ガラス乾板の「膜面返し」技術の実際』(画像史料解析センター、2016年、DVD-ROM)
- 久留島典子・高橋則英・山家浩樹編『文化財としてのガラス乾板』(勉誠出版、2017年)
- 『画像史料解析センターの成果と課題 II—設立 20周年記念報告書—』(画像史料解析セ
 ンター、2018年)
- 『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第 37号～第 79号 (2007～2017
 年)

センター研究集会等 (国内・国際)

- 「日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」(2007年5月、日本学士院と共催)
- 「画像史料解析センター開設 10周年記念研究集会 画像史料研究の成果と課題」(2007
 年6月)
- 「公開研究会 歴史の中の地図Ⅱ 地図—知の交差点」(2007年7月)
- 『「日本荘園絵図聚影」積文編中世ワークショップⅢ』(2007年10月)
- 「鳥取県民カレッジ連携講座 デジタル画像システムでたどる湯梨浜町の歴史 (2007年
 11月)
- 「公開研究会 近世社会と地図作成」(2008年7月)
- 「シンポジウム 歴史の中の地図Ⅲ 近代国家形成と地図作成—比較史的視点から—」
 (2008年7月)
- 「国際研究集会 日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」(2009年5月)
- 「シンポジウム 歴史のなかの地図Ⅳ 政治と文化」(2009年7月)
- 「古写真研究会 (第1回・第2回)」(2009年7月・11月)

- 「シンポジウム 歴史のなかの地図Ⅴ 江戸と江戸城—市民社会と政治文化—」(2010年9月)
- 「国際研究集会 比較研究:「抗倭図巻」と「倭寇図巻」」(2010年11月)
- 「研究集会 江川文庫古写真調査報告」(2010年12月)
- 「荘園絵図に基づく地理情報システム構築の研究会」(2010年12月)
- 「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」(2011年10月)
- 「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会 倭寇図巻と抗倭図巻をめぐる新視角—美術史の立場から—」(2011年12月)
- 「お伽草子絵巻ミニ・シンポジウム」(2012年10月)
- 「第97回人文科学とコンピュータ研究発表会」(2013年1月、画像センター共催、情報処理学会主催)
- 「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」(2013年4月)
- 「倭寇と倭寇図像をめぐる研究集会—美術史の立場から2—」(2014年1月)
- 「研究会・展示会 海図からみる震災と地域」(2014年2月)
- 「研究集会 ガラス乾板の調査・保存・研究資源化に関する研究」(2014年11月)
- 「映画上映会・講演会 海の把握・支配をめぐる経済史・科学史・歴史学の対話—19世紀を中心に—」(2015年1月)
- 「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」(2015年4月)
- 「巡見・講演会 天下祭再考—昔と現在—」(2015年11月)
- 「研究会 官版日誌類に関する史料学の構築及び戊辰戦争期の情報と地域に関する学術的研究」(2016年2月)
- 「シンポジウム 長篠・設楽原の戦いを考える」(2016年2月)
- 「国際研究集会 Photography at the South Kensington Museum」(2016年7月)
- 「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会 東アジアの合戦図を考える—清朝編」(2017年4月)
- 「研究集会 写真資料の保存と学術資源化をめぐる」(2017年5月)
- 「国際研究集会 東アジアの古地図研究」(2017年9月)
- 「文京アカデミー特別公開講座 古絵図を読み、屏風絵を語る—東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター設立20周年記念—」(2017年10月)
- 「文京アカデミー・アカデミア講座【東京大学史料編纂所協力講座】画像史料から見る日本史」(2017年10~12月 全5回)
- 「画像史料解析センター設立20周年記念公開講演会 画像史料の語る日本史」(2018年1月)

史料展示・展覧会等

- 東京大学オープンキャンパス「画像史料の研究と史料集—屏風絵・絵巻・絵図・古写真から歴史の舞台が甦る!—」(2014年8月)

木展（所内対象の史料展示）「長崎唐通事何礼之関係史料・北方歴史資料館旧蔵高田屋嘉兵衛関係史料 古写真コレクション」（2014年10月）

東京大学オープンキャンパス「画像史料の研究と史料集 ～屏風絵・絵図・古写真から歴史の舞台が甦る！～ミニ特集大坂の陣～」（2015年8月）

東京大学オープンキャンパス「史料を後世に伝える営み」（2016年8月）

東京大学オープンキャンパス「絵と写真の語る日本史」（2017年8月）

iii 外部資金

※研究プロジェクトと関連する外部資金のうちプロジェクトメンバーが研究代表者であるもののみを掲載

科学研究費補助金

2004～2007年度科学研究費補助金基盤研究（A）「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」（研究代表者 加藤友康）

2004～2007年度科学研究費補助金基盤研究（A）「荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究」（研究代表者 林譲）

2006～2008年度科学研究費補助金基盤研究（A）「地図史料学の構築—前近代地図データ集積・公開のために—」（研究代表者 杉本史子）

2007～2010年度科学研究費補助金基盤研究（A）「東アジアの国際環境と中国・ロシア所在日本関係史料の総合的研究」（研究代表者 保谷徹）

2008～2011年度科学研究費補助金基盤研究（A）「画像解析とフィールドワークに基づく荘園絵図情報システムの構築」（研究代表者 高橋敏子）

2008～2011年度科学研究費補助金若手研究（B）「東アジアにおける儀礼文化の比較歴史学的研究」（研究代表者 稲田奈津子）

2009～2011年度科学研究費補助金基盤研究（A）「「地図史料学の構築」の新展開—科学的調査・復元研究・データベース—」（研究代表者 杉本史子）

2009～2011年度科学研究費補助金基盤研究（C）「19世紀日本関係古写真の調査収集と解析による年次的研究」（研究代表者 谷昭佳）

2011～2013年度科学研究費補助金基盤研究（A）「ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究」（研究代表者 保谷徹）

2011～2014年度科学研究費補助金基盤研究（B）「拓本調査を基盤とする日本金石文の情報資源化と歴史叙述への応用的研究」（研究代表者 菊地大樹）

2012～2015年度科学研究費補助金基盤研究（A）「画像解析と歴史・地理情報の高度活用に基づく荘園絵図の総合的研究」（研究代表者 榎原雅治）

2012～2015年度科学研究費補助金基盤研究（B）「中世における合戦の記憶をめぐる総合的研究—長篠の戦いを中心に—」（研究代表者 金子拓）

- 2012～2014 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「近代化模索期の「国史」編纂と地図作成—赤門書庫旧蔵地図の研究」(研究代表者 杉本史子)
- 2013～2015 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「独逸瑞三国における 19 世紀日本古写真と日本認識素材の復元的研究」(研究代表者 谷昭佳)
- 2014～2018 年度科学研究費補助金基盤研究 (S) 「マルチアーカイヴァル的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」(研究代表者 保谷徹)
- 2016～2018 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「歴史資料としての湿板写真ガラス原板の調査と研究資源化の研究」(研究代表者 谷昭佳)
- 2017～2020 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 「前近代人物情報論の構築にむけた花押・筆跡の網羅的収集と汎用的利用に関する研究」(研究代表者 林讓)
- 2017～2020 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「近世統一政権の成立と天下普請の展開—中近世移行期史料の研究資源化を通じて—」(研究代表者 及川亘)
- 2017～2019 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「近代国家模索の歴史的前提—18～19 世紀、「極東」のなかの「日本」」(研究代表者 杉本史子)

その他の外部資金

- 2005～2007 年度角川文化振興財団助成金「崩し字データベースの作成」(研究代表者・久留島典子)
- 2008 年度財団法人福武学術文化振興財団研究助成金「幕末・明治期における正倉院宝物調査の研究—森川杜園の模写・模造を中心に—」(研究代表者 稲田奈津子)
- 2010～15 年度東京大学史料編纂所共同利用・共同拠点・特定共同研究 (複合史料領域)
「関連史料の収集による長篠合戦の立体的復元」(研究代表者 金子拓)
- 2011～2013 年度東京大学史料編纂所共同利用・共同拠点・特定共同研究 (海外史料領域)
「本所所蔵品ならびに中国国家博物館所蔵品にみる「倭寇」像の比較研究」(研究代表者 須田牧子)
- 2011～2013 年度三菱財団人文科学研究助成金研究「幕末維新期の在奥日本関係古写真・ガラスネガの総合的研究」(研究代表者 保谷徹)
- 2016～2018 年度東京大学史料編纂所共同利用・共同拠点・特定共同研究 (複合史料領域)
「戦国合戦図の総合的研究」(研究代表者 金子拓)

iv 画像史料解析センター運営委員会委員一覧

(●印センター長・○印専任教員)

年度	2007	2008	2009	2010	2011
委員長 (2号委員)	尾上陽介	尾上陽介	高橋敏子	高橋敏子	鴨川達夫
1号委員 (センター所属 教授・准教授)	○石上英一 ○末柄豊 ○高橋敏子 保谷徹 ○山口和夫	○石上英一 ●○林譲 ○保谷徹 松井洋子	○石上英一 ○林譲 ●○保谷徹 松井洋子	●久留島典子 箱石大 ○林譲 保谷徹 松井洋子	●○久留島典子 ○箱石大 ○林譲 保谷徹 松井洋子
2号委員 (本所所属 教授・准教授)	箱石大 ●林譲	箱石大	小宮木代良	小宮木代良	小野将 尾上陽介
3号委員 (所長が必要と 認めた者)	井上聡 小野将 須田牧子 松澤克行	井上聡 小野将 須田牧子 松澤克行	井上聡 須田牧子 藤原重雄	井上聡 須田牧子 藤原重雄	金子拓 藤原重雄
2012	2013	2014	2015	2016	2017
鴨川達夫	末柄豊	末柄豊	小宮木代良	小宮木代良	渡邊正男
●○久留島典子 ○箱石大 ○林譲 保谷徹 松井洋子	○金子拓 ○高橋敏子 ○箱石大 ●○林譲 保谷徹 ○松澤克行	○金子拓 ○高橋敏子 ○箱石大 ●○林譲 保谷徹 ○松澤克行	○及川亘 ○金子拓 ○高橋敏子 箱石大 ○保谷徹 ●山口英男	○及川亘 ○金子拓 ○高橋敏子 箱石大 ○保谷徹 ●○山口英男	○及川亘 ○黒嶋敏 ○高橋敏子 藤原重雄 ○保谷徹 ●○山口英男
小野将 尾上陽介	杉森玲子	杉森玲子	佐藤孝之	佐藤孝之	岡美穂子
金子拓 ○木村直樹 藤原重雄	井上聡 及川亘	井上聡 及川亘	稲田奈津子 井上聡 ○堀川康史	稲田奈津子 井上聡 堀川康史	荒木裕行 遠藤珠紀

おわりに —研究事業 10 年間の成果と展望—

報告書のまとめとして、画像史料解析センターの 2007～16 年度の 10 年間の活動成果を整理し、今後の方向性について展望したい。

この 10 年間のセンター研究事業で、関連分野に与えるインパクトの大きかったものとしては、倭寇図巻 PJ (I 6)、古写真及びガラス乾板関係 PJ (I 9・I 22)、長篠合戦図 PJ (I 5) などがあげられる。倭寇図巻 PJ では、編纂所が所蔵する絵画史料として代表的なもののひとつである「倭寇図巻」を取り上げ、その史料的性格の解明に迫った。近赤外線デジタル撮影による塗りつぶされた文字の発見・解読、そして中国に存在する「抗倭図巻」と呼ばれる類似の史料との出会いが、本史料をめぐる研究状況を一変させた。古写真・ガラス乾板関係 PJ はセンターの研究事業の基幹的内容の一つでもあり、出所・伝来の確かな古写真コレクションを持つ史料的価値が次々と明らかになる形で展開し、編纂所に残されたガラス乾板の保存と活用に向けた着実な歩みが進められた。古写真の解析はもとより、その学術資源化と、そのために必要な技法や方法論の模索・検討は、関連分野・関連機関が共通して関心を持つ文化・研究事業として大きなうねりが形成されることにつながった。長篠合戦図 PJ は、大日本史料の編纂作業を発端とし、取り上げるべき画像史料の収集と基礎分析を進めることで様々な知見や新たな研究視角を提供し、学界・社会の関心を高めた。

これらと同様に、これまで知られていなかった、あるいは十分な検討の及んでいなかった画像史料(群)を取り上げ、その史料的価値を明らかにし、研究への活用を図った活動として、内務省引継地図 PJ (II 4)・近世都市図解析 PJ (II 7)・天下普請 PJ (II 8)・近世儀礼 PJ (II 10)・森川杜園 PJ (II 12)・赤門書庫旧蔵地図 PJ (II 14)・江戸城図 PJ (II 15)・日蘭画像 PJ (II 21) などがあげられる。

画像史料研究の底上げ・活性化を支える意味から、センターの継続事業と位置付けられるのが歴史絵引・中近世肖像画関係 PJ (II 1・II 2) であり、関連情報はデータベースの形で研究ツールとしての利用をはかり、その整備・充実を進めた。また、センター設立以前から行われてきた編纂所の地誌史料編纂の伝統を引き継ぐ荘園絵図 PJ (II 3) は、『日本荘園絵図聚影』釈文編 2 冊を刊行した。肖像画 PJ・荘園絵図 PJ はいずれもセンターの基幹的事業に位置づけられる。画像史料の公開では、編纂所所蔵史料を公開する肖像画模本 DB (III 4)・荘園絵図模本 DB (III 6)・金石文拓本 DB (III 7)・摺物 DB (III 8)・錦絵 DB (III 9)・古写真 DB (II 10) などがあり、データの追加・充実、システムの開発・整備を進めた。

花押彙纂 PJ (II 16)、電子くずし字 PJ (II 19)、古文書料紙 PJ (II 23) などは、絵画的描写とは対象が異なるが、様々な史料から画像として視覚的に得られる情報の解析研究と位置づけられるものである。特に電子くずし字 PJ は、奈良文化財研究所・木簡字典 DB との連携検索の実現という画期的な事業を開始した。

センターの活動において、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』の刊行が持つ意味も大きい。センターの活動の成果と関連の情報の発信媒体として、史料紹介・

史料分析の成果を蓄積し、新出の研究文献の内容紹介や一覧を掲載するなど、他に類例のない充実した内容を持ち、年4回のペースで継続刊行した（既刊分の全目次は史料編纂所ホームページに掲載）。

センターの研究組織としての運営で大きな特徴となるのは、流動性のあるスタッフ構成である。史料編纂所に所属する教員が数年程度の期間、センタースタッフとして研究を担う形で配置されるという人員編成を行っている。また、本所教員は誰もがプロジェクトを構成することができる。研究の主体性を確保し、広い視野から多様な画像史料に目を配る意味で有効な方式であろう。ただ、その場合、研究活動の組織としての継続性や体系性、研究課題の構築から収束に至るサイクルの確保といった面への配慮が必要なことも確かである。これらについては、研究プロジェクトの中からセンターの基幹的な事業と位置付けるものを選定するとともに、各プロジェクトには1～3年程度を区切りとする研究計画と活動報告の提出を求め、センター以外のメンバーを含めた運営委員会で審議・承認する手続きをとっている。個別の活動内容だけでなく、センターの研究活動全体を点検・評価する機会となっている。今後とも厳正な自己規律に基づくこれらの運用が不可欠である。

以上、この10年間のセンターの活動は、それ以前の10年間の成果を引き継ぎつつ、画像史料（群）の新たな解析による史料的価値の解明と、データ公開の拡大・整備を含め、関連研究の底上げ・活性化に資する研究環境整備のための継続的事業の推進並びに効率化の面で、着実かつ注目すべき成果を上げたといえる。メンバー構成と運営システムがその活動の下支えとなった。これらの方向性は今後の活動の指針となろう。

センターが設立された20年前に比べて、画像データの電子的公開は社会の中で飛躍的に進展した。所蔵資料の画像を電子データとして公開・提供することが、博物館・図書館・資料館など多くの所蔵機関にとって展開すべきスタンダードとなりつつある。この点、センターの取り組みが設立当初に持っていた先駆性は解消された。しかし、こうした状況が生まれたことによって、データの電子的蓄積の成果を研究の進展に結びつけていく活動はますます重要となっている。センターは、このような形の画像史料研究の進展・牽引を組織の目的として活動している唯一の存在であり、その役割の継続・発展には大きな意義がある。日本史分野における画像史料研究の核として期待される活動を担うことが、今後ともセンターの重要な責務である。

センターが画像史料（群）を対象として展開して来た研究の手法は、画像史料にとどまらず、歴史学が対象とするすべての史料体へのアプローチにおいて適用可能な普遍性・応用性を持っている。個々の史料体に対し、試行的な、あるいは従来なかった解析を施すことで、その学術的価値を抽出し、新たな研究展開につなげていく方向である。そうした方向への展望も、組織論として将来の視野に入りうるものであろう。

画像史料解析センターの成果と課題 II
—設立 20 周年記念報告書—

2018（平成 30）年 1 月 25 日

画像史料解析センター設立 20 周年記念事業実行委員会 編集
東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター 発行
東京都文京区本郷 7-3-1